

明治廿

一年一月至十二月



東洋學藝雜誌

第五卷

版權所有

東洋學藝社

18554



倉敷紡績株式會社圖書部
除籍圖書印

103.0



168422

昭和6年9月 日
 番 1187
 分 七
 架 五

18054

(三)

東洋學藝雜誌第五卷 自第七十六號 目錄

○ 論 說 括弧内ノ數字ハ號數 最下段ノ數字ハ頁數

學校德育論再質加藤君	杉浦重剛	(七六)	一	支那古代哲學史一斑	瀧川龜太郎	(七八)	一二六
微粒子病肉眼鑑定法(圖入)	佐々木忠二郎	(七六)	四	同上ノ續キ		(七九)	一六九
著述者ノ權	木下廣次	(七六)	九	同上ノ續キ		(八〇)	二四八
病氣ノ話	三宅秀	(七六)	一八	同上ノ續キ		(八一)	二九一
硫黃島	松原新之助	(七六)	三一	日本ノ舊世界(着色銅版圖)	小藤文次郎	(七九)	一六一
研究の説	中澤岩太	(七六)	三五	酒ノ害ヲ論ジテ大日本節酒會員諸氏ニ			
疾病の原因(圖入)	佐々木政吉	(七七)	五五	忠告ス	宮下俊吉	(七九)	一八〇
講義用空氣ノ成分檢定器	久原躬彦	(七七)	六二	マダネチスムノ話(銅版圖一枚)	山川健次郎	(七九)	一九〇
小笠原島及火山群島地質摘要(圖入)	菊池安	(七七)	六四	平面國の話(圖入)	菊池大麓	(八〇)	二一五
日本食物要論	森要太郎	(七七)	六九	同上ノ續キ		(八一)	二六七
現今虎列刺病原説(圖入)	緒方正規	(七七)	七八	精神ノ養生	大澤謙二	(八〇)	二二三
葡萄糖の合成	櫻井錠二	(七七)	八八	作文ふつきての心得	中郎秋香	(八〇)	二二五
甲鐵艦と非甲鐵艦の利害	三好晋六郎	(七七)	九〇	熱ト化學作用トノ關係(圖入)	櫻井錠二	(八〇)	二三二
同上ノ續キ		(七八)	一三九	攝生小言	三浦守治	(八一)	二七〇
謹で我邦の貴紳諸君に質す	加藤弘之	(七八)	一一三	地震動ノ性質ヲ示ス雛形(銅版圖入)	關谷清景	(八一)	二七六
國會議事堂の話(英米獨佛國會議事堂圖面入)	辰野金吾	(七八)	一一八	裁判化學の効用(圖入)	丹波敬三	(八一)	二七八
				消火及び防火法(圖入)	高松豊吉	(八二)	三一七
				蕁菜粘稠液細胞論(石版圖入)	伊藤篤太郎	(八二)	三二六

平方根立方根ヲ發見スル進路ヲ收縮スル

コノ規則ニツイテ 澤田吾一 (八二) 三三六

寶石の話(着色石版圖并木版圖入) 和田維四郎 (八二) 三四二

同上ノ續キ (八三) 三九二

治外法權の話 鳩山和夫 (八三) 三六九

同上ノ續キ (八四) 四二三

ハロノ説明(圖入) 難波正 (八三) 三七四

近親結婚ノ害(圖入) 石川千代松 (八三) 三七九

東京小日向切支丹坂ノ名義(圖入) 中山興 (八三) 三九八

有毒植物(着色石版圖入) 下山順一郎 (八四) 四二九

明治今日ノ文章 中邨秋香 (八四) 四三四

理學者ノ快樂 櫻井錠二 (八四) 四三七

アイノ名 坪井正五郎 (八四) 四四二

女生徒ノ心得 矢田部良吉 (八四) 四四三

比較解剖學ノ話(圖入) 飯島魁 (八五) 四七三

幾何學ニ付テ(圖入) 菊池大麓 (八五) 四八七

同上ノ續キ (八六) 五三七

同上ノ續キ (八七) 五八五

磐梯山破裂ノ話(着色銅版圖一枚并石版圖三枚入) (八五) 四九三

同上ノ續キ (八六) 五二九

磐梯山ト寶永山(圖入) 菊池安 (八五) 四九九

刑法進化ノ話 穂積陳重 (八五) 五〇三

同上ノ續キ (八六) 五四一

鑛山ノ話 巖谷立太郎 (八六) 五五〇

樂器妙音ノ新考(圖入) 伊藤篤太郎 (八六) 五五六

練習ノ話(圖入) 大澤謙二 (八七) 五九一

日本ノ火山(着色銅版圖二枚并木版圖入) 小藤文次郎 (八七) 六〇〇

化石象齒鑑定報告(銅版圖入) 金田樞太郎 (八七) 六一五

燧白及燧杵(圖入) 若林勝邦 (八七) 六一六

○ 雜 報

一月二日の夜ハロの現象(圖入) (七六) 四一

グルーコス或ハ葡萄糖の合成 (七六) 四二

東京化學會 (七六) 四三

ブロクサム氏 (七六) 四三

酸素の工業 (七六) 四三

ニウトン祭 (七六) 四四

(五)

田中館愛橘君	(七六)	四四	二月六日ハロの現象(圖入)	(七八)	一四九
學士會	(七六)	四四	二月七日ハロの現象(圖入)	(七八)	一四九
地震動と家屋建築法取調委員會	(七六)	四五	二月廿四日ハロの現象(圖入)	(七八)	一五〇
大學通俗講談會	(七六)	四六	サカリン	(七八)	一五一
安全ランプ	(七六)	四七	ホフマン氏	(七八)	一五一
バルフオアー、スチユワルト先生死す	(七七)	九五	微粒子病肉眼鑑定法	(七八)	一五一
東京數學物理學會と伊能忠敬の碑	(七七)	九六	デ、バリー氏	(七八)	一五一
一月廿九日ハロの現象(圖入)	(七七)	九六	獨乙學藝雜誌の隆盛	(七八)	一五二
二月六日のハロ(圖入)	(七七)	九七	地震動と家屋建築法取調委員會	(七八)	一五二
美術家の注意	(七七)	九八	革皮を製する新法	(七九)	二〇三
帝國大學	(七七)	九八	コルクの代品	(七九)	二〇三
石川千代松君	(七七)	九九	魚類の滋養分	(七九)	二〇三
幾何學教課書	(七七)	九九	東京化學會第十年會	(七九)	二〇三
英國人エチプライヤル氏	(七七)	九九	二月廿四日山口に於て見たるハロ(圖入)	(七九)	二〇四
大學通俗講談會	(七八)	一四八	四月五日山城に於て見たるハロ(圖入)	(七九)	二〇五
田中正平君洋琴を改良す	(七八)	一四八	小説の種	(七九)	二〇五
佛蘭西建築家の失策	(七八)	一四八	教と育の別	(七九)	二〇六
古き種を持ち出す	(七八)	一四八	帝國大學紀要	(七九)	二〇六

(六)

東京數學物理學會年會	(八〇)	二五六	天隕石中の金剛石	(八一)	三〇一
懸賞問題	(八〇)	二五七	旅人の琴	(八一)	三〇一
弓の強さ	(八〇)	二五七	日本人	(八一)	三〇二
油を以て波濤を静めると	(八〇)	二五七	地震動雛形	(八一)	三〇三
理學士の欠乏	(八〇)	二五八	東京數學物理學會懸賞問題	(八一)	三〇三
鐵器に白金鍍金を施す法	(八〇)	二五八	東京數學物理學會講義	(八一)	三〇四
地震は越歴氣を起す	(八〇)	二五八	市川盛三郎獎學金	(八一)	三〇四
金剛石産出高	(八〇)	二五八	帝國大學分科大學卒業證書授與式	(八一)	三四七
埃及地方の衛生	(八〇)	二五八	試験の成績	(八一)	三四七
博士の學位	(八〇)	二五九	動物學の進歩	(八一)	三四八
二月廿四日備中玉島に於て見たるハロ <small>(人圖)</small>	(八〇)	二五九	東京高等女學校卒業證書授與式	(八一)	三四八
毛布を漂白する新法	(八〇)	二六〇	安全ランプ	(八一)	三四九
新發明衛生炭酸計	(八〇)	二六〇	大學紀要の評	(八一)	三五〇
四角なる石油	(八〇)	二六一	磐梯山の噴火 <small>(圖入)</small>	(八一)	三五〇
米國女教員	(八〇)	二六二	鎌いたち	(八一)	三五一
新藥アンチ、フェブリン	(八一)	二九八	ハロの原因	(八一)	三五二
第一高等中學校生徒第二回唱歌演習會	(八一)	二九八	四乗以上の形体 <small>ふ付て</small>	(八一)	三五二
大陸の中央	(八一)	二九九	磁力の三原素	(八一)	三五二

第一高等中學校卒業証書授與式	(八二)	三五二
霧島岳の噴煙(圖入)	(八二)	三五三
二月十日のハロ(圖入)	(八二)	三五三
隕石	(八二)	三五四
男山八幡神社ノ黄金ノ雨樋	(八二)	三五四
奇猫	(八二)	三五五
英國林娜學士院第百年回祝筵	(八三)	四〇六
人類ノ卵子	(八三)	四〇九
發生學上ノ一大發見	(八三)	四一〇
渡瀬莊三郎氏	(八三)	四一〇
西洋音樂の流行	(八三)	四一〇
化學分析所の設立	(八三)	四一〇
東京物理學校	(八三)	四一一
啖肉植物も亦優勝劣敗の數を免れざる乎(八三)	(八三)	四一一
オックスフォード大學の新教授	(八三)	四一二
愛知嘗百社及び三重好友社博物會	(八三)	四一二
名譽博士	(八三)	四一三
大學通俗講談會	(八四)	四四七

數學の教科書	(八四)	四四八
寺尾壽氏算術教科書	(八四)	四四八
菊池大麓氏幾何學教科書	(八四)	四四八
佛國學術研究出張	(八四)	四四八
新天文書	(八四)	四四九
スチユワルト氏	(八四)	四四九
葦菜に寄寓するバクテリア	(八四)	四四九
螳螂亦能く小禽を捕獲す	(八四)	四五〇
生命保險	(八四)	四五〇
磐梯山破壊部測量	(八四)	四五一
ウオット氏化學辭書の新版	(八四)	四五一
那須岳の噴煙及び地震	(八四)	四五二
樹上の家屋	(八四)	四五三
美濃石灰	(八四)	四五四
東京醫學會總會記事	(八五)	五一〇
人造の石油	(八五)	五一四
磐梯破裂の演説	(八五)	五一四
磐梯の埋れ木	(八五)	五一五

磐梯の優敗劣勝	(八五)	五一五	大不列顛理學獎勵會	(八六)	五七〇
磐梯破裂して氣候變換す	(八五)	五一五	オーストララシヤ洲理學獎勵會	(八六)	五七〇
動物學雜誌	(八五)	五一六	アイノの髑髏	(八六)	五七〇
隕石中の金剛石	(八五)	五一六	大學紀要理科	(八六)	五七一
フオム、ラート氏	(八五)	五一七	東京數學物理學會普通講義	(八六)	五七一
南極圈の遠征	(八五)	五一七	市川獎學金	(八六)	五七一
大地球儀	(八五)	五一七	伊學協會	(八七)	六二三
神保小虎氏と北海道	(八五)	五一七	レムセン氏化學書	(八七)	六二三
八月一日の大流星	(八五)	五一八	物理學譯語辭書	(八七)	六二三
奈良縣鑛坑發火の源因	(八五)	五一八	大學通俗講談會	(八七)	六二六
伊太利語	(八六)	五六六	萬國東洋學會	(八七)	六二六
地形圖	(八六)	五六六	萬國海上會議	(八七)	六二六
火山噴災の百年目	(八六)	五六六	關賞牌	(八七)	六二七
萬國地質學會	(八六)	五六七	地學雜誌	(八七)	六二七
動物學雜誌	(八六)	五六九	ゴム版	(八七)	六二八
亞米利加發見之四百年紀	(八六)	五六九	○ 雜 錄		
プロクトル氏死す	(八六)	五七〇	江刺八景詩 賴三樹	(七七)	九九
佛國の長壽者	(八六)	五七〇	伯耆國東部の方言 宮脇郁	(七七)	一〇一

學理上偽寒暖計ノ多キヲ憂フ O M (七七) 一〇三

初涙 龜齡道人譯 (七七) 一〇三

衛生ト地水(圖入) 小藤文次郎 (七七) 一〇四

地方ニモ亦工手學校ノ設立ヲ望ム 田舎山人 (七八) 一五三

グレイ氏ノ略傳 矢田部良吉 (七八) 一五六

獨國植物學士デ、バアリ氏傳 伊藤篤太郎 (七九) 二〇八

黒潮 ビー、ケー (八〇) 二六二

古物 毘沙門の本地 青萍逸人寄送 語本 (八一) 三〇五

同上ノ續キ (八二) 三六一

同上ノ續キ (八四) 四六一

同上ノ續キ (八六) 五七四

同上ノ續キ (八七) 六三二

豊前小倉ノ人西秋谷翁八十ノ壽詩 (八一) 三一〇

詩二首 青萍逸人 (八二) 三六〇

獨逸學生事情一斑(木版一) 箕作元八 (八二) 三五五

磐梯山ヲ見後ル、勿レ 關谷清景 (八三) 四一三

高知縣に高等中學を設立すべきの

意見 外山正一 (八三) 四一四

男女交際ノ作法 箕作佳吉 (八四) 四五四

松下蘇平の事を記す 中邨秋香 (八四) 四五八

足立氏を送る文 中邨秋香 (八六) 五七二

優敗劣勝 き、だ、 (八七) 六二九

高島嘉右衛門氏の教育演説 岩波五郎 (八七) 六三一

○ 應 問

球丸電光ノ問ニ答フ (七六) 四七

墜体速度ノ問ニ答フ 村岡範爲馳 (七六) 四八

土壤分析法ノ問ニ答フ 渡邊朔 (七六) 四九

水醋製造法ノ問ニ答フ(圖入) 高松豊吉 (七七) 一〇七

磁石力ノ問ニ答フ (七九) 二一二

鎌蝕ノ問ニ答フ H M (八〇) 二六四

藍玉分析法等ノ問ニ答フ T T (八二) 三六五

流星ノ問ニ答フ (村) (八三) 四一七

平面國ノ話ニ付テノ問ニ答フ 菊池大麗 (八四) 四六五

鑽石ノ分析 (八四) 四六八

藍ヲ立ツルニ灰汁ヲ用フル事ニ付テ (八四) 四六八

柿實ノ澁甘ニ就キテノ問ニ答フ 箕作佳吉 (八五) 五一九

螢ノ光ニ就キテノ問ニ答フ 箕作佳吉 (八五) 五二一

動物學雜誌ニ就キテノ問ニ答フ 箕作佳吉 (八五) 五二一

磐梯ノ優敗劣勝ニ就キテ B K (八六) 五七九

礦物硬度標本 巨智部忠承 (八六) 五八一

飛蠶消滅法 大久保三郎 (八六) 五八一

ゴツサマーノ問ニ答フ K K (八七) 六三六

クイツキサンドノ問ニ答フ (小藤) (八七) 六三七

草木ノ葉秋ニ至リ變色スルノ理并ニ其色ニサマノゾノル所以ノ問ニ答フ 松村任三 (八七) 六三八

○ 批評

東京數學物理學會記事卷三第三冊 (七七) 一〇九

理學士實吉益美氏著平算教課書 (七七) 一一〇

海野力太郎氏著算線學 (七七) 一一〇

鈴木彦人氏譯補飲水試驗新法 櫻井錠二 (七八) 一五七

レイノルド氏著實驗化學第四卷 ゼー、エス (七九) 二一二

水場貞長氏著 日本 獨逸 合級小學校 (八〇) 二六五

社會之顯象 (八〇) 二六五

教育學藝之標準 (八〇) 二六五

シールジツン氏稻耕肥料實驗 B K (八一) 三一一

開國始末 K W (八一) 三一二

谷間の姫百合 K W (八一) 三一二

リーランド氏實業教育編 手島精一 (八三) 四一八

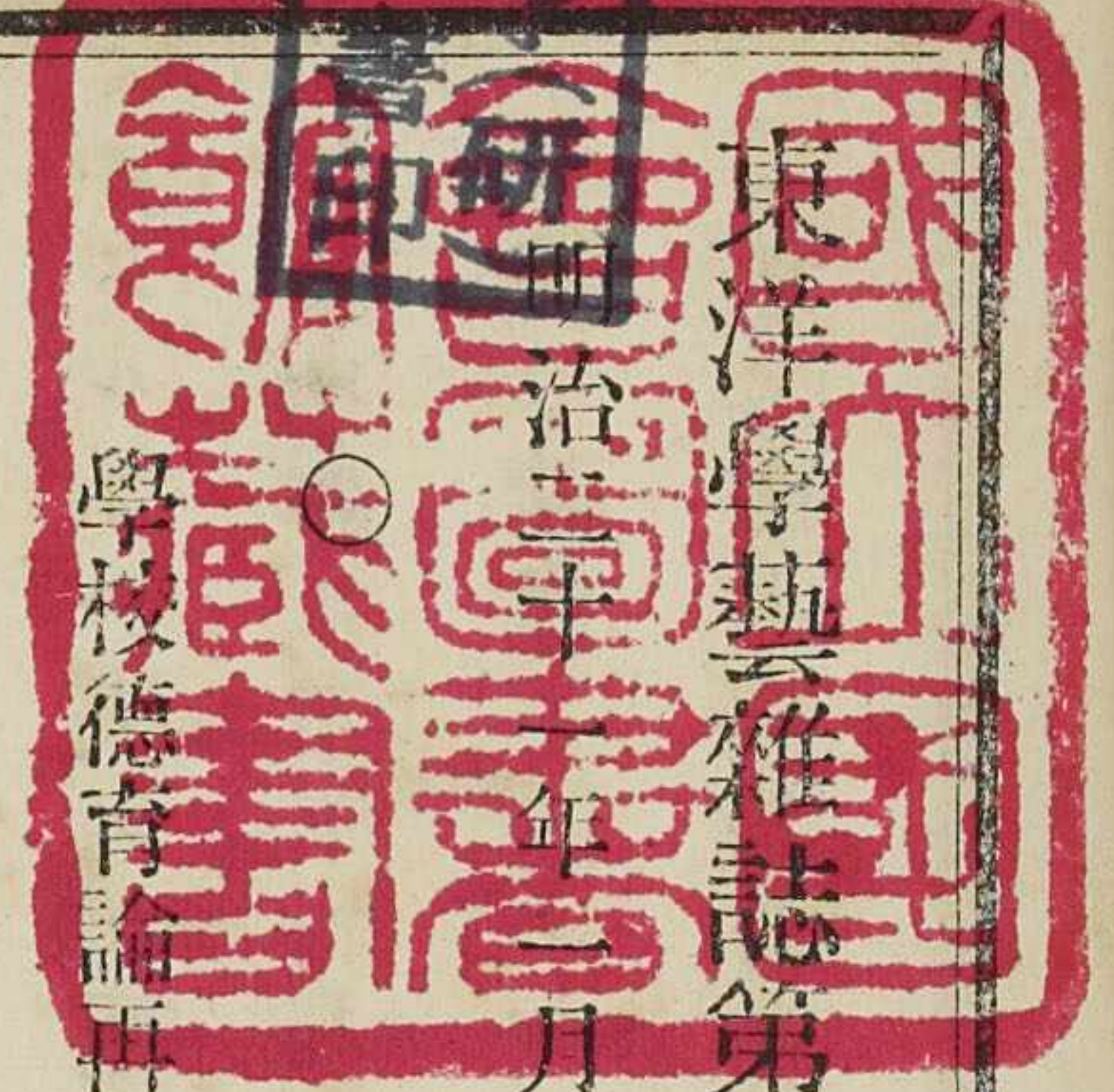
新ニ發行ノ諸雜誌ニ付テ き、だ (八四) 四七〇

ツルントン氏地文學書 B K (八五) 五二二

サロモン氏越歷溜メ管理法 H N (八五) 五二四

勞働科
除籍

明治二十一年一月二十五日發兌



東洋學藝雜誌第五卷第七十六號

一月二十五日發兌

學校德育論再質加藤君

杉浦重剛

維新以前士族風ノ教育ヲ見ルハ七八分通りハ德育ニシ
 テ學校若クハ之レニ類スル場處ニ於テハ概テ皆此教育法
 ニ依ラザルハナシ而シテ其德育ノ方法ニ至リテハ儒佛混
 合トデモ云フヘキ格言等ヲ服膺シ之レヲ實踐躬行セシム
 ルニ在リトス是レ等ノ學校若クハ之レニ類スル場所ニ於
 テ教育ヲ掌ル處ノ教員ハ啻ニ書物上ノ智識ヲ授クルニ止
 マラスシテ其他日常百般ノ事ニ至ルマテ皆子弟輩ノ標準
 トナルニ足ルノ資格ヲ備フルヲ常トセリ尤モ其人物ノ學
 識才幹等ニ依リテ其及ボス處ノ影響ニモ亦頗ル廣狹ノ度
 ヲ異ニスト雖モ兎ニ角ニ教育ノ任ニ當ルモノハ一種ノ品
 格ヲ有セシヤ蓋シ疑ナカル可シ
 蓋シ我國ニ於テハ古來儒佛混合ノ体裁ニテ學問上ノ事柄
 ハ凡テ成立來リシ者ナレハ因習ノ久シキ途ニ此混合物ヲ
 以テ一般教育ノ方法トナスニ至レリ然レモ我國ニハ自カ

ラ我國一種ノ國體アリテ所謂祭政一致ノ國體ナレハ皇室
 ノ位地ハ常ニ外國ヨリ入り來リタル思想ノ上ニアリテ儒
 佛等ノ道ニ至リテモ常ニ皇室ニ依リテ其重キヲ加ヘタル
 カ如キ事實アルハ之レヲ我國ノ歴史ニ徵シ明カナリ鎌倉
 ノ霸府以來ハ儒佛ノ道亦タ霸府ノ左右スル處トナルニ至
 レリ右ニ述フル處ヨリ之レヲ見テ直ニ又法律ト道德トノ
 關係ヲ推知シ得ヘシ即チ昔日ニ在ツテハ今日ノ法律ニ比
 スレハ大ニ道德上ノ意思ニ因リテ法律ヲ斟酌セシ處アリ
 シコ之レ也夫レ斯ノ如ク殆ント法律ニ依リテ道德ヲ維持
 セシカ如キ体裁アリ從テ政治家ナリ法律家ナリ其局面ニ
 當ル者モ勢ヒ道德家タラサルヲ得サルノ傾向アリシハ免
 カル可カラサルノ數ナリ然レモ此組織ニテ萬事皆ナ其權
 衡ヲ得タレハ社會ノ秩序自カラ紊亂セサルヲ得シナラン
 以上陳フル處ニ依レハ從前ノ學校教員ハ余ノ常ニ主張セ
 ル日本教員ノ資格ヲ有セシモノニシテ即チ西洋ノ教員兼
 僧侶ノ位地ニ立チシモノナリ故ニ是レ等ノ教員ヲシテ今
 日ノ時勢ニ際シ昔日ト同一ノ影響ヲ及ホサシムルヲ能ハ
 スト雖モ教員タルノ品位上ニ於テ尙ホ或ハ見ルヘキノ点

168422

ナキニシモアラス然ルニ維新以後ニ至リテハ智育德育等ノ別ヲ立テ法律ト道德トモ漸次ニ其間ニ徑庭ヲ生スル處アリテ又舊時ノ風ヲ存セサルニ至レリ是レ所謂西洋ノ直譯若クハ翻譯ナルヘケレモ西洋ニ於テハ尙ホ社會ノ一大原素タル宗教ナルモノアリテ秩序ヲ整理スル上ニ於テ其効甚多シ即チ西洋ノ學校ニ於テハ主ニ智育ヲ施セトモ別ニ寺院ニ於テハ宗教ヲ以テ德性ヲ養フノ道アリ法律ト道德トハ全ク相區別スト雖モ法律感ニ過クルノ場合ニ於テハ人民ノ道德心期セスノ相會シ終ニ法律ヲ左右スルノ力ナキニシモアラス如此西洋ニ於テハ又社會ノ秩序一種特別ノ形ニテ權衡ヲ得ルハ猶ホ我國ノ昔日ニ於ケルカ如シ一斯ノ如ク論シ來ルルニハ速ニ夫ノ學校ノ德育ニハ昔シノ儒佛二教ノ上ニ耶蘇教モ入レタラハ如何ント云フノ思想モ起ルヘシト雖モ西洋ニ於テ耶蘇教ノ勢力ヲ社會上ニ占メタルコトハ決シテ儒佛ノ兩教カ我國ノ社會上ニ勢力ヲ及ボシタルカ如キ弱小ナルモノニアラス故ニ今日ニ在リテモ尙ホ社會ノ他ノ大原素タル法律學術等ノ如キモノト相對シテ尙ホ其勢力ヲ專ラニスルコトヲ得ルナリ是レ千百年

ノ因習ノ致ス處ニシテ決シテ一朝一夕ノ事ニアラサル也如此淵源アル宗教ナレモ人智次第ニ進ムニ從テ漸々衰退スルノ勢ヒニ立至リタルハ如何ニ負ケ吝ミノ強キ宗教家ト雖モ蓋シ爭フコト能ハサル處ナラン於是乎今日我國學校ノ德育上ニ於テハ實ニ言フヘカラサルノ困難ヲ免カレサルモノアリ即チ一方ニ於テハ昔日ノ儒佛混合體ノ教員ヲシテ德育ノ先導者タラシメン乎三尺ノ童子ト雖モ誰レカ復タ昔日ノ如ク百般ノ標準ヲ彼レニ取ルモノアラシヤ若シ標準ヲ彼レニ取ルガ如キコアルニ於テハ早晚社會ニ立チ常ニ一步ヲ人ニ輸スルカ如キ有様ニ立至ルヘキヤ蓋シ疑ナカルヘシ否ナ今日德育ノ振ハサルヲ慷慨スルノ學者教育家等カ世ニ多キハ即チ取りモ直サス從來ノ儒佛混合先生ニテハ是レ等ノ慷慨學者ヲ満足セシムルノ教育ヲ施シ得サルヲ見ルヘキナリ然ラハ論者ハ是レ等ノ古物先生ヲ如何ニ燒キ直シテ將來ノ用ニ供セラルヘキヤ余ノ甚タ問ハマホシク存スル處ナリ前述ノ勢ヒナレハ先ツ從來ノ德育先生ニテハチト損育トモ相成ルヘキ傾向アレハ當テニナラヌモノト見做シタ處

デ差引勘定スレハ耶蘇教ガ殘ルコトナレリ處デ耶蘇教カ
 如何ナルコトヲ教ヘルカト云ヘハ儒佛杯ノ説ク處ニ比シテ
 氷炭相容レサルカ如キコトヲ教ユルニアラス矢張善惡邪正
 トカ云ヘルコトヲ懇説スルニ外ナラサルヘシヨシヤ少シノ
 差ハアルニモセヨ人殺シ盜賊ヲ以テ善事トハヨモナササ
 ルヘキ筈也然ラハ如何ナル点ニ於テ前ノ二教ト其趣キヲ
 異ニスルヤト問ハ、唯西洋傳來ト云フ一点ニ外ナラサル
 ヘシ近來ハ頻リニ舶來物ノ流行スル世ノ中トナリタレハ
 之レモ舶來ダカラトテ賞翫スル茶人モアルヘケレモ先ツ
 云ハ、日本酒ト「ビール」トノ違ヒ位ニ見倣シテ可ナラン
 但シ此点ニ於テハ唯耶蘇教ヲ以テ道德ヲ教ユルノ一方便
 トシタル考ナレモ夫ノ宗教トシタル点ヨリハ業ニ已ニ理
 學ト交戦シ漸々ニ本陣迄ヘモ斬リ込マレ敗色ヲ顯ハシタ
 ル處ナリ此落武者ノ輩カ東洋諸國等ノ如キ所謂半開國ヘ
 來リテ別天地ヲ開カン杯ト云フコトヲ企ツルカモ知ラサレ
 且我國ニ於テハ已ニ理學ノ八陣ヲ布キ東洋學藝雜誌ト題
 スル旗ヲ押シ立テ威風凜々ト備ヲ嚴重ニシテ待チ構ヘタ
 レハ一二ノ輩カ辛フシテ哨兵線ヲ潜リ抜ケ入り込ムモノ

、ナキヲ保シ難ケシモ兎ニ角ク我國內ニ於テ勢力ヲ得ル
 コト夫ノ西洋諸國ノ昔時ニ於ケルカ如キ有様ニ立至ラサラ
 ヘキハ蓋シ疑ヲ容レサル處ナリ然ラハ耶蘇教モドーヤラ
 餘リ頼モ敷ナサソ一ナリ
 ソコデ余ハ曾テ一種ノ主義ヲ呈出セシコアリ（拙著ノ鬼
 哭子、鬼笑子、鬼怒子、日本教育原論、及ヒ大日本教育會雜
 誌第六十八号等ニ散見ス）雖然之レハ主義ノ論ニメ之レ
 ヲ學校一般ニ實施スルノ方法ニ於テハ別問題ニテ余カ特
 ニ茲ニ論述シ置カンコトヲ欲マル處ナリ日本ニハ三千八百
 萬ノ人口アリト稱スレモ之レヲ左右スレニハト流社會少
 數ノ團結ニテ事足ルヘシト余ハ思考ス故ニ此問題ニ於テ
 モ此趣旨ニ基キテ述フル處アラントス已ニ此篇ノ始メニ
 於テ論セシ如ク我國ハ最早昔日ノ如ク政治法律道德相待
 ツテ權衡ヲ維持シタルノ有様ナラスノ寧ロ西洋流ナリト
 謂ハサルヲ得ス然レモ從來ノ習慣ハ尙ホ存シ西洋ノ宗教
 ハ入り込ミ難キノ事情アレハ德育ハ學校若クハ之レニ類
 スル場處ニ於テ之レカ責ニ任スルヨリ外ニ手段アルコトナ
 シ而シテ其レヲシテ有効ナラシムルニハ其職ニ任スルモ

ノハ學術優等ノ外ニ品行志操才能并ヒ備リタルモノヲ任用センコトヲ力メサルヘカラス而シテ己ニ之レヲ任シタル上劣等ノ品位ニ下ルモノアルハ遠慮會釋ナシニ之レヲ擯斥セサルヘカラス是レ等ノ事假令ヒ公然タル法則トナス能ハサルニモセヨ學者教育家等ノ上流ニ位スルモノカ固結シテ之レヲ決行シタランニハ決シテ無益ノ業トハナラサルヘシ且ツ夫レ是レ等ノ上流社會ニ於テモ自カラ死地ニ陥リタルノ有様ニテ勢ヒ自ラ反省スル處ナカルヘカラス是レ余ノ特ニ學者教育家中ニ於テ上流ヲ占ムルノ諸士ニ向テ希望スル處ニシテ特ニ學士會院ノ會員諸君ニハ尤モ望ミヲ屬スル處ナリ

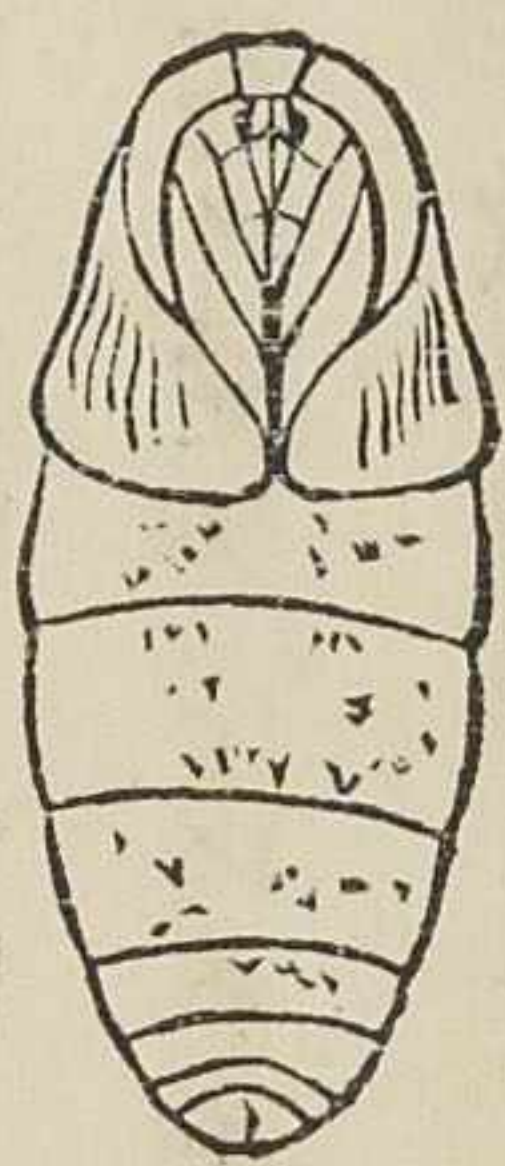
○
微粒子病肉眼鑑定法(前々號の續)

東京農林學校教授 佐々木 忠二郎

今ま若し蚕蛹を繭の内より取出し之れを調査する時に當りて微粒子毒を含めるならば蚕蛹のからだ何んもなく軟かにして緊りなく其腹部を動かす摸様も不充分となり皮膚ハ固有の着色も光澤をも失ひ或は軀軀の表裏に濃褐色

の斑紋若くは点紋を現はし或は翅鞘(翅鞘とは蚕蛹の胸部に密着して後ちに蚕蛾の翅となるべきものを包める鞘を云ふなり)に灰黒色黒褐色等を呈するを常とせり但し蚕蛹の軀軀何んもなく軟かにして緊りなきもの、蚕蛹の腹部の充分に活動せざるもの、又ハ蚕蛹の軀軀固有の着色滑澤等を失ひたるものには蛆害其他種々の病症に罹れるもの亦尠しとせず尤も蛆害に罹れるものなればいつしか其氣門の周りに黒斑を呈するものと知るべし苟も右等の病徴あるとあらざると一拘らば微粒子毒を含めるや否やを鑑別せんと欲するならば必ずしも蚕蛹の軀軀の表裏即ち背面腹面特に其腹面ニ就きて充分の調査を要するなり蚕蛹果して微粒子毒を其軀内に含めるならば其背面及び腹面に褐色若くは黒褐色の斑紋點紋等を現はすなり是れ實ハ蚕蛹の軀内に微粒子毒を含蓄するの特徴となす然れとも此特徴は蚕蛹の背面には之れを存ずると存せざることをあるに拘はらず其

第一圖



腹面には必ず之を存するものなれを讀者の宜く重もに腹面に就きて調査を遂ぐべきなり(第一圖)但し蚕蛹の腹部の裏面には左右平等に褐色點の均列するものあり是れは單に蚕兒の時具へ居たる腹脚の痕跡なれを異々も微粒子毒を含めるの特徴をなせる斑紋点紋等と看誤まると勿れ尙ほ腹脚の痕跡と微粒子毒を含めるの特徴たる斑紋点紋とを區別するに敢て六ヶ敷ことに非ず只だ前者は均列正しけれども後者は其均列不齊なることにて容易く彼れと是れとを辨別し得べきなり又た蚕蛹の翅鞘に灰黒色黒褐色を帯びたるものも蚕蛹の体内に微粒子毒を含めるの特徴なり此特徴を存するものは矢張腹面には例の特徴を呈するものなれば腹面の調査は實に忽せにすべからざる要件なりと知るべし玆に一つの注意すべきとありは他にあらざる蚕蛹は口を経て將に蚕蛾を出さんとする時は翅鞘は必ず灰色を帯びて妙しく皺だちたるの状を呈するものなり之を以て右に述べたる微粒子毒を含めるの特徴と看錯るべからざる今世間の養蚕者が蚕繭をより分くるを視るに多くは繭面の模様にて之れを爲し或は數拾個の繭

を切開きて之れより取出したる蚕蛹の健全なるやならざるやを視定の然る後數百數千の繭の善長なるとならざるその部合を定むるなり特に其部合を定むると云ふは重もに蚕蛹の蛆害を受けをるや否やを見定むるまでにして未だ充分に健全無病の蚕蛹を選み取るの方法は之れを了知せざるると信ずるなり何んとなれば微粒子毒に罹れる蚕蛹の如きは往々何等の病徴を呈することなく其舉動の如きに至りても更に健全無病の蚕蛹と異なることなく尙ほ其蛹の蟄せる繭の如きも健全無病の蚕蛹の蟄せる繭と更に異なることなれをなり余の所謂健全無病の状態をなせる蚕蛹に微粒子毒を含めるをを辯識するの要點とする處のものに實に蚕蛹の翅鞘と体驅の背腹兩面ニ就きて調査することにより之れを爲すには必しも蚕蛹を繭内より取出さざるを得ざるなり然れども數百數千の繭を一々切開きて蛹を調査することは到底實業者の爲し得べきことに非ずして且つ之れを調査せんと欲するとても時日の冗費夥しくして應用することハ到底六ヶ敷事と信ずるにより余は只だ完全無病の繭内に蟄せる蛹にして健全無病の状

態を爲せるものに就き微粒子毒の存する部合ひを定むる等の事ある時は無論余の主張せる蠶蛹の翅鞘及び軀の背腹兩面に存する特徴に據りて爲すべきなり

第六 蠶蛾の後れて産出するもの「ムギテフ」「シリヤケ」と稱する病蛾、翅の充分に開張せずして縮小せるもの、玉繭より産出したる蛾、其他蠶蛾の舉動不活潑なるものは數種の病症に罹れるものなれども尙ほ微粒子毒に罹れるものも敢て尠しとせず「シリヤケ」「ムギテフ」の如き病蛾は凡う百年前よりも養蠶に熱心なるもの了知せる處にして製種には之れを用ひざるとなせりと此「シリヤケ」「ムギテフ」の如き病蛾は重みに微粒子毒に罹れるものなれば微粒子毒の如きは近頃頭に現出せしものに非ずして百年前に於ても矢張蠶蛾に微粒子毒を存じたりと云ふ事は推して識るべきなり「蠶蛾の翅の充分に開張せずして縮小せるもの及び玉繭より産出する蠶蛾の如きも亦世の養蠶者は製種の用に供せざるも何等の病原に據て此病徴を呈せるやは未だ充分に研究せしものなしと信ず右二種の病蛾は同じく重みに微粒子毒に罹れるものなるに特更

に玉繭なからんことを欲して様々の器具を拵へて無暗に一ツ繭を造らしめんとするものあるハ實に歎かはしきこととに非ずや（但絲繭になす目算ならむいざしらず）扱右に陳述したる病蛾は盡く除去なしたりとて充分に微粒子毒に罹りたる蠶蛾を取盡したりとは云難し何となれを微粒子毒を含める蠶蛾には更に右等病徴を呈するをなくして健全無病の蠶蛾と異ならざることあればなり其健全無病の状態を爲せる蠶蛾にして微粒子毒を含める時ハ大約其腹面に病徴を呈するものなり但し其病徴と爲す處のもののは茶褐色、濃褐色黒褐色等の斑文にして重みに蠶蛾の腹部の腹面にて胸部に接

第二圖



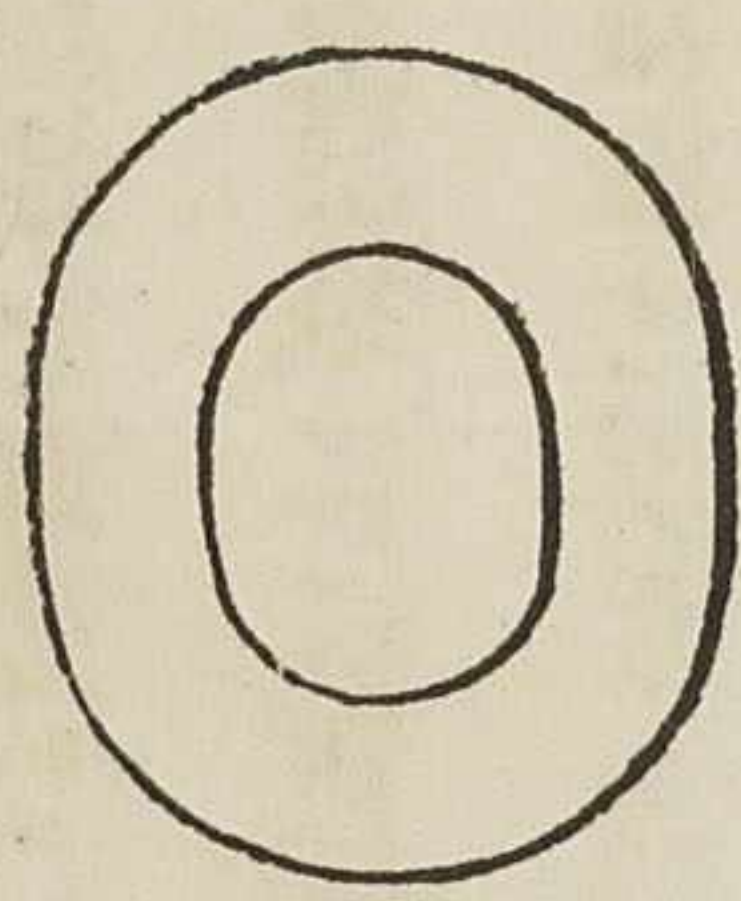
する處に存するものなるも（第二圖）或は胸部の腹面即ち脚の付け元に存じ或は罕れに軀の背面にも存することあり尤も是迄唱へ來れる病蛾にても微粒子に罹れるものなれば矢張其腹面に右の特徴を呈するものなれば蠶蛾の腹面に存する特徴ハ實に肉眼を以て微粒子毒の存するを

鑑別するの要點と爲す且又此特徴の如きは蚕の業に熟達せる人は勿論假令此業にうとき人にて一たび之れを認識したらんには一個人にして一時間ニ數百數千頭の蚕蛾を閱して有毒と無毒のものを充分に區別することを得べきなり

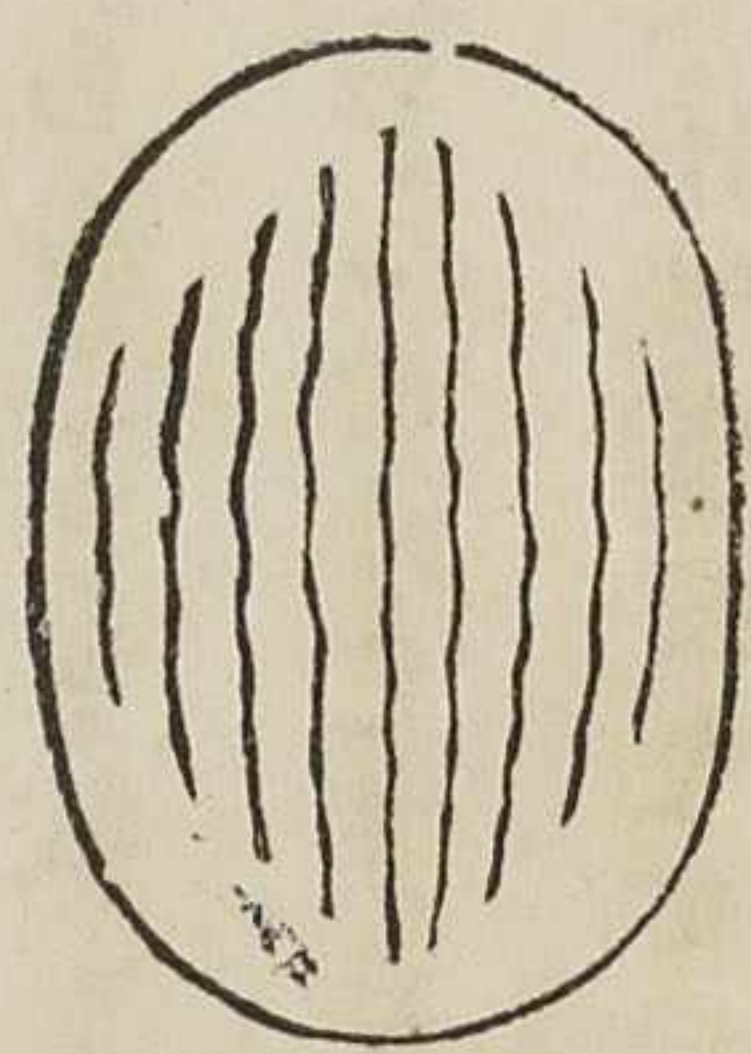
第七 右第一項より第六項に至るまでの事實を篤と心に記し蚕兒蚕蛹蚕蛾を肉眼にて調査し微粒子毒ハ勿論其他の病症にも罹らざる健全無比の蚕兒蚕蛹蚕蛾と微粒子毒ハ勿論其他の病症に罹りたるものを選り分け前者ハ之れを取り後者ハ之れを捨て前者の蚕蛾より卵子を撮るならば其卵子たるや健全よして病因なきことは敢て疑ひを容れざる處なり凡う蚕蛾に卵子を産ましむる時間は各縣各郡に於て多少の遅速ありて更に一定するをなく甲は産卵時間を五六時間と定むれば乙は六時乃至十時間と定め甚しきに至りては翌朝までも産卵せしむるあり余ハ此産卵時間をいづこも同じ様に致したきを望むなり其時間の如きは大約四五時間と定め夫れより以後に産むべき卵子ハ綜て用ひざるハ頗る其宜きを得たるものなり其理いか

にと尋ぬるに大約蚕蛾は番ひを放したる后ち四五時間の卵子を産み續けて暫時産卵を停め其後ち再び産卵するなり尤も初めの四五時間に産下せる卵数は五百乃至六百顆にして是れより以後に産せる卵数は僅かに百數十顆なるを常とす斯くて初めの四五時間に産みたる卵子は健全にして病因なきことは無論なれども後ちに産みたる卵子の如きは假令微粒子毒は之を含まざるに拘らず其質幾分か弱きものなり且又初めの四五時に産みにたる卵子の如きは(第二圖)綜へて橢圓にして其中央には尠しく凹みを存するを常とせれども後ちに産みたる卵子の如きは(第四圖)其形ち大約長橢圓にして或は其一端太くして他端は

第三圖



第四圖



稍や狭小なるを常とし且つ其卵面には微々たる凹みもなく反つて凸よして之れに縦線を存するものなり斯くの如く前きに産みたる卵子と後ち

に産みたる卵子とは其形ちと線紋の有無にて辨別することを得るものなれば宜く卵紙面を視たるのみにて大約卵子を産ましめたる時間を判定することを得べし世の蠶卵紙を製造する人は勿論之れを購求する人の如きも篤と此點に注意を加ふべきものとす

第八 凡う蠶卵は桔梗色にして白粉を振まきたるの状を爲すものなれども尙ほうすあづき色、褐色、濃褐色を呈せるあり或は「シラス」「シラコ」などと稱ふる帶黃白色の卵もあり又た「ツブレタマゴ」と稱へ卵面潰れて赤褐色を帶たるもあり特に黃繭の卵子には多少綠色を帶ぶるを常とせり扱善長なる卵子と稱ふるものは重もに桔梗色にして尠しく白粉を敷けるが如き状を爲すものを云ひ（但し黃繭の卵子は茲に論述せず）うすあづき色の卵子の如きハ蚕兒に給與せる桑園の地味に依て生ずると云ひ褐色濃褐色の卵子及び「シラス」「ツブレタマゴ」の如きは其質善長ならざるものにして特に「ツブレタマゴ」の如き大約微粒子毒を含めるれどと唱ふるものあり元より桔梗色にして尠しく白粉を敷けるの状を爲すものを善長の卵子と

するは余も亦信する處なれども其中ち一粒をも微粒子毒に罹らざるとは言ひ難く褐色濃褐色の卵子の如きも桑園の地味に據りて生ぜるものとも言ひ難く「シラス」「ツブレタマゴ」の如きを以て善長ならざるとするは實に宜しき事なれども之れを以て微粒子毒を含めるの徴候とハ決して爲すこと能はざるなり何んとなれば「シラス」は單に精蟲を受けざる卵子にして後ちに其面に凹みを生じ潰れ卵となればなり故に「シラス」や「ツブレタマゴ」を以て微粒子毒を含めるの特徴となし卵紙面に存ずる「シラス」「ツブレタマゴ」等の多寡にて微粒子毒の多寡を判定すべしと云ふが如きは實に取るに足らざる臆説なり若し果して「シラス」「ツブレタマゴ」の多寡にて微粒子毒の多寡を判定するを得るならば態々顯微鏡を持出して卵子を檢査するに及ばざるなり將た又た「シラス」「ツブレタマゴ」の如きは到底翌年に至りても孵化すること能はざるものなれを假令微粒子毒を含み居たるとても其毒を他に傳搬することを得ざるものなり又た卵紙面に堆く産付けたる卵子其他卵紙面に確と付着せざる卵子を以て微粒子毒に

罹れるの微候となすものあり成る程右等の卵子は幾分か
 疾病に罹りたる蚕蛾の産みたるものなることありと雖ど
 も之れを以て盡く微粒子毒を含めるの微候とは決して爲
 し得べからざるなり随分産卵の位置の模様と蚕蛾の種類
 とに據りて右等の卵子となることなり

右の諸項に陳述したる事柄を心に記し置き蚕兒孵化の際
 は勿論蚕兒と爲り蚕蛹と爲り蚕蛾と爲るまで絶へず心を
 用ひて病徴あるものは勿論微粒子毒を含めるの特徴ある
 ものは勉めて之れを除去し健全無病の蚕兒を選別して之
 れを飼育する方法には充分に心を用ひ尙ほ蚕蛹蚕蛾の
 如きも健全無病のもののみを選び取り抄しにても微粒子
 毒を含めるの特徴あるものは盡く之れを除去し健全無病
 の蚕蛾より卵子を撮り適當の方法に據り之れを貯へ之れ
 より蠶兒を孵化し出したらんには其蠶兒たるや健全にし
 て其營む處の繭は善良に其蛾の産むところの卵子は健全
 にして病因なきことは敢て疑ふべきも非ざるなり然りと
 雖へども養蠶法其宜きを得ざる時は其卵子の善惡に拘ら
 ず失敗を來すものなれを健全無病の蚕兒蚕蛹蚕蛾を肉

眼を以て選抜すると同時に養蚕の方法には充分に注意す
 べきなり苟も養蚕に志しあるものは此鑑定法に依り充分
 に病蚕病蛹病蛾を除くことを得るも之れを用ひずして只
 た蚕卵紙のみに就き調査を爲して其宜きを得たりなどと
 思ふは實に誤りの甚しきものとす何んぞ徒らに病徴特に
 微粒子毒を受けたる特徴を存ずる蚕兒蚕蛹蚕蛾を取除か
 ずして之れを飼育し其蛾の産卵し終はりたるを待ち初め
 て其卵子のみに就きて調査するの理あらんや讀者も亦篤
 と考へ見られよ

(畢)

○

著述者、權

法科大學教授 木下廣次述

今夕聽聞ノ諸君ハ大抵文藝工藝技藝ヲ以テ其身ヲ立テ若
 クハ將ニ立テント欲セラル、處ノ人々ナリト信ズルナレ
 バ我輩ノ演題ハ諸君中或ハ現在ニ於テ其利益ヲ感ゼラル
 、人モアルベク又ハ未來ニ於テ參考ノ用トナルコトモアル
 ベク兎ニ角學問社會ニハ必要ノ問題ナレハ法意シテ聽聞
 アランコトヲ欲ス

今夕説ク所ノ著述ノ權ニ付テハ我輩カ發見シタル奇説明論ヲ吐クニハ非ラズ單ニ今日世界中ニ有觸レタル儘ノ事ヲ述ベ世ノ中ノ有様ヲ諸君ニ示シ諸君ト向來ノ進路ヲ共ニセント欲スルニ在ルノミ

法律ニ關スル演説ハ往々多少分析シテ説明スルコト肝要ナリ然ルニ他ノ器械ヲ假ラズシテ無形上ノ分析ヲ示スコトハ説法者ノ困難ハ因果ヅクト見テモ聽衆ノ精神ヲ勞スルニ於テハ實ニ氣ノ毒ナリ

扱モ頃口ハ天保六年八月十二日我邦ノ有名ナル一ノ小説者ハ無量ノ想像ト博識トヲ以テ其編ム所ノ有名ナル八犬傳第九輯ヲ終ラントスルニ臨ミ無涯ノ恨ヲ公衆ニ述ベテ云ヘル様ハ予カ著シタル物ノ本或ハ合卷ト唱ル繪册子ノ古ビタル板家扶イタカブヲ購求メテ恣ニ畫ヲ新ニシ且書名ヲ改メテ新板ニ紛ラシツ、翻刻シテ鬻ク者アリソハ勸善常世物語三國一夜物語化鏡丑二鐘ナトナリ近屬又括頭巾縮緬紙衣三卷ヲ重刻シテ椀久松山物語ト書名ヲ改メ出像ヲ新ラシクセシモノアルヲ見ル(中畧)書名ノ更サマモ甚イカナル狡兒ノ所爲ナリケン椀久松山物語ト改メシハ作者ノ用意

ヲ得ソ知ラヌ寔ニ烏許ノ黠竄ナルカナ(中畧)又高尾船文字ハ寛政七年予カ始メテ綴リシ策子物語ナレハイト拙クテ今サラニ又見ルニ得堪ス去歲ノ冬夫ヲ重刻シテ端像ヲ新クセシモノ出タリ(中畧)作者ニ重刻ノ義ヲモ告ズ恣ニ畫ヲ更ヘ書名ヲ更ヘテ竊ニ蠅頭ノ微利ヲ欲スル歟人ヲ人トモ思ハザリケル皆是賈豎ノ所行ニソ有ケル(中畧)四十年前ノ拙作ニテ疎文云フベクモアラザルヲ翻刻シテ世ニ出サレテハ穉キ折セシ手習葉子ヲ老後ニ汝カ手蹟ソトテ賣弄セラル、ニ異ナラズ(中畧)吾在世ニスラ書肆等カ恣ナルコ如此死後ハ如何ナルベキソモ浮タル名ノ所以ニハ在レト名ヲ賣ラル、コソウルサケレ近世明和安永年間風來山人平賀鳩溪カ戲墨ノ策子太ク世ニ行レシカハ其身後ニ至リテモ偽作セシモノ多ク出タリ今ヲ以テ昔ヲ思ヘハ我上ニノミアラザリケル云々

是ナン名高キ八犬傳弓張月ノ著述者ナル著作堂馬琴翁ニテゾ有ケルカ、ル翁ヲシテ此歎慨ヲ懷カシムルハ偏ニ法律保護ノ功德カ當時著述者ヲ洩シタルニ依ル今日幾多ノ著述者カ他ノ心配ナク駭々トシテ著述ニ著述ヲ重子古今

未曾有ノ著述世界トナリタルハ實ニ著述者ノ權我日本法律中ニ顯出シタルノ結果ナリ乍去馬琴翁ノ歎迄ニハ至ラザルモ著述者權ノ顯出日尙淺ク庶人未ダ其權ノ明細ヲ承知セヌ故往々著述者ノ權ヲ蔑視スル者アリテ著述者中儘正當ノ不平ヲ懷ク人ナキ能ハズ是余ガ特ニ此問題ヲ掲ゲタル由縁ナリ

第一節 總論

今日苟モ文明國ト稱スル國ニハ法律皆著述者ノ權ヲ認知セザルナシ然レモ著述者權ノ發生ハ法律中尤モ近代ノモノナレバ諸國ノ法律未ダ全備ト云フ譯ニ至ラズ素ト思想ノヲナレハ一國丈ニ止マラズ容易ク國境ヲ越ヘテ外國ニ傳播スルモノナレバ著述者權ニ關スル法律モ國際上ノ一問題トナリ著述者等ハ屢々萬國協議會ヲ開キ其得失利害ヲ論究セリ因テ著述者權ノ性質モ未ダ確定ノ域ニ達セザリシナリ

凡ソ權利ニハ必ス目的アリ然ラハ著述者權ノ目的ハ如何様ナルモノナルヤト云フニ著述者權ノ基ク目的物ハ著作物ナリ著作物トハ穴勝ニ外形ニ顯ハレ記錄文字ニ顯ハレ

タルモノニ限ラズ著述者カ腦裏ニ貯ヘタル著作即チ無形物ヲモ含ムナリ「カジミールトラビニユ」ノ如キハ芝居ノ戲作ヲ記錄セズシテ記憶ニ存セシト云フ思想傳播ノ具タル印刷ヲ用ユザルモ著作ハ自ラ無形中ニ存ズルヲ得ルト知ルベシ

扱テ著述者權ノ作用ハ如何ニト云フニ 第一著述者ハ其欲スル所ノ方法ニ從テ自己ノ著作ヲ世ニ公ニスルコトヲ得ルコト 第二著述者ハ他人ガ恣ニ其著作ヲ刊行スルコトヲ禁シ得ルコトノ二事ナリ

俗テ何故ニ著述者ハ有様ノ權ヲ有スルヤト云フニ法學者中ニ議論大別シテ二派ニ分ル一ハ著述者ハ法律ノ特許ヲ以テ特別一種ノ權ヲ得タリト云ヒ一ハ著作ハ著述者カ所[○]有權ナルガ故ニ著述者ハ刊行及ビ他人ノ刊行禁止ノ二權[○]アリト云ヒ未ダ何レトモ一定セズ右門戶ヲ張リ國ニ因リテ贊成者ノ數ヲ異ニスレモ所有權ノ說世界中多數ニ居ル趣ナレハ余ハ先所有權說ニ左祖シテ述ブベシ尤モ詳細ノ議論ハ法學上ノ議論ナレハ此席ニ於テ述ルヲ欲セズ凡ソ人ノ働勞ヨリ得タル結果ニシテ有形物ナレハ働勞者

ハ其物ノ所有權ヲ有スルト云義ハ既ニ爭フ可ラザル社會ノ原則タリ山賊カ木ヲ削リテ杵ヲ造リ權助ガ種ヲ播テ五穀ヲ得ル其杵其五穀ハ働勞者ノ所有ニ人又之ヲ爭フ能ハズ然ラバ我人カ精神腦髓ヲ勞シ得タル著作ハ假令ヒ無形物ナリトモ正シク働勞ヨリ生シタル結果ニ形コソナケレ物ハ物ナレハ精神働勞者ノ所有物ナリト云フニ何ノ妨アル可キヤ我人カ種々ノ材料ニ就キ一ノ思想ヲ纏メ其思想ニ一ケノ体形ヲ與フルノ働勞ハ工藝者カ品物ヲ製造スルト分析上異ナルコトナシ工藝者コソ其製造品上ニ所有權ヲ得ルナラバ著述者ニ其製造ノ著作ニ所有權ナキノ理アラシヤ均シク働勞者ニ其結果ニ二様ノ差別ヲ設クルハ理ノ許サ、ル所ナリ然ルニ反對者アリテ云フ様ハ著述者ガ著作ヲ組立テタル材料ノ根ヲ紮セバ皆ナ我々社會ノ事物ニ非ルハナシ著述者ガ思想中ニ組立タルモノハ著述者カ固有特別ノモノニ非ラズ其材料ハ或ハ社會カ數百年經過シ來リタル經驗ノ結果ナリ或ハ社會現在ノ有様ナリ或ハ先輩ノ思想論說ナリ是等ハ誰人ノ所有ト云フモノニ之レナク即チ社會全体共有ノ事物ニテ人々取テ我物ト

爲スコヲ得決シテ著述者一ケ人カ固有特別ノ物トナスヲ得ズ例ヘハ馬琴カ八犬傳中ノ網乾左母次郎ハ當時無賴ノ一浪人ヲ寫シ濱治ハ或ル家ノ御嬢様ヲ寫シヨボロメ丁田町之進ハ當時代官手代某ヲ寫シ仁義禮智孝悌忠信ノ八犬士ハ支那心理學ノ名目定義ヲ人表シ其趣向ハ水許傳ニ據ル等皆ナ社會ノ事物ナリ「パスカール」カ言ニ著述者ハ已レノ著作ト云フ代リニ我々ノ著作ト云フ可シト云ヘル如ク天下共有ノ事物ヲ以テ一己ノ私有物トハ法理ノ許サヌ所ナリト論者ノ說ノ如ク材料ハ天下ノ事物ナレハ社會人々ノ共有物タルコト疑ナシ所有權論者モ萬モ材料ヲ以テ著述者固有ノ物件ナリト論ズルコトナシ乍去多數ノ材料中ニ就キ尤モ適當ノ材料ヲ撰ミ其材料ヲ組立テ、思想ニ一ケ獨立ノ体形ヲ與フルコトハ其人ノ知識丈ケ能力丈ケニ止マルモノナレバ即チ其人ノ分量ヲ表シ其人自ラヲ顯ハシタルモノニテ其人ノ固有物ト云フモ何ノ妨アラシヤ今假ニ一ノ問題ヲ與ヘ多數ノ人ヲシテ同様ノ材料ヲ以テ文章ヲ草セシメシニ多數ノ人ニ能力知識ノ大小輕重アルト同時ニ其草スル所ノ文章策論ハ各其持前ノ手技ヲ顯ハシ各其形体ヲ異

ニシ各其著作文章ニ著述者自ラヲ描出スヘシ是等ハ學校
 試驗者ノ實際ニ目撃スル所ナリ韓退之ハ退之風ノ文章ア
 リ福澤先生ハ先生風ノ文章アルベク決シテ混同シ能ハザ
 ルナリ一ノ浮浪人一ノ御嬢様一ノ代官手代等ヲ材料トシ
 及ヒ其趣向ヲモ同一ノモノトシ數人ヲシテ小説ヲ著ハサ
 シメニ馬琴ハ馬琴丈ケ京傳ハ京傳丈ケ春水ハ春水丈ケ
 各其趣ヲ異ニスルハ當然ナリ何トナレハ思想知識能力ハ
 人々其度ヲ異ニスレハナリ有名ナル動物學者「ビュフホン」
 ハ文章ハ即チ其人ナリト云ヘリ即チ文章著作ハ作者ノ描
 影ト云フ意ニテ誠ニ思想ニ與ヘタル形体ハ直ニ其作者ヲ
 表出シタルモノナレハ即チ他ト區別スルコトヲ得ルナリ己
 ニ他ト區別スルコトヲ得ルナレハ之ヲ作者ノ固有物ト云フ
 モ何ノ妨アラシヤ河水ハ共有物ナリトモ一杯ヲ酌テ我瓢
 ニ盛ラバ誰カ其水ノ所有權ヲ爭ハンヤ空氣ハ共有物ナリ
 其一部ヲ取テ我輕氣球ニ密鎖セハ誰カ又其空氣ノ所有權
 ヲ爭ハンヤ

如此著作ハ著述者ノ所有權ト論定シタル上ハ他ノ所有權
 ト同視ス可キヤ否ノ問題アリ均シク所有權ナレハ他ト同

シク子孫ニ永續セシムベキ道理ナルガ如何ニセン諸國ノ
 法律皆ナ子孫繼續ヲ許サズ著述者ノ死後三十年若クハ五
 十年ニシテ消滅シ著作ハ社會ノ共有物トナルベキモノト
 セリ斯ク期限ヲ設ケタルハ穴勝チ暴政ノ故ニモ非ラズ一
 ケ人ノ私有トシテ永代ニ存ズルハ社會カ恣ニ出版スル
 ヲ得ズ隨テ社會ノ利益ヲ害スルノ恐アリ特ニ芝居戲作ノ
 如キハ演劇毎ニ永代ニ所有者ノ承諾ヲ要スルコトスレハ
 其不都合少ナカラザル故ニ所有ノ年限ヲ設ケタルナリ言
 ハ、不動産ノ所有權トテモ國家公共ノ利益アレハ國家カ
 引上ケテ國益ニ供スルト一般ノ理屈ナリ

第二節 著述者權ノ作用

著述者ハ其著作ノ上ニハ所有權ヲ有スルコトナレバ他ノ所
 有權ト同様ニ施行スルヲ得ベキナリ即チ使用収益處置ノ
 三權ヲ有スルナリ即チ之ヲ賃貸スルモ刊行スルモ校正削
 除廢棄スルモ著述者ノ勝手ナリ

著作刊行ノ場合ニ於テ著述者ト購讀者トノ關係ハ論述ス
 ルコト肝要ナリ著述者カ其著作ヲ世ニ公ニシタリトモ素ヨ
 リ著述ノ所有權ハ其身ヲ離ル、コアル可ラス其理ニアリ

第一理 抑モ言語ト云ヒ文字ト云フモ元是均シク思想交通ノ一方法ナリ著述者ハ右二方法ノ一ヲ撰デ其思想ヲ傳播シ得ルハ其自由ナリ社會公衆ニ於テハ聞クト讀ムトノ差ハアルトモ思想ノ交通ヲ得ルニ至テハ一ナリ故ニ演說トシテ聞キ書籍トシテ讀ムハ其事異ナルガ如キモ思想交通ノ一法方ヲ買ヒタルモノナリ今假ニ著述者カ文字ニ因テ傳播スルノ方法ヲ用ヒタリトセンニ其方法ノ顯ハレタルモノヲ書物トモ云ヒ冊子トモ云ヒ單ニ本トモ云フ其体裁ニ至テハ製本師一家ノ語ヲ爲シ卷トシ部トシ種々ノ趣アリ其本其書物ハ製本者ト物數奇者トノ助ヲ以テ高價ノモノトナリタリトモ根元ハ思想傳播ノ一方法タルニ過ズ然レバ書物ヲ買タル者ハ著作ヲ買タルニ非ラズシテ著作傳播ノ方法ヲ買タルナリ然レハ其方法ハ賣買ニ因テ買主ノ手ニ移リタレモ著作全体ハ曾テ著述者ヲ離レス依然トシテ其所有ニ存ゼリ故ニ著作傳播方法ノ買人ハ其方法即チ書物ノ所有者ナレハ座右ニ置テ愛玩スルトモ他人ニ與フルトモ破棄スルトモ又ハ其書中ノ思想論說ヲ取テ自己思想ノ材料トスルトモ買人ノ勝手ナレモ所謂著作全体ハ

始メヨリ買取リタルモノニ非ザルカ故ニ著作全体ニ就テハ一切ノ權ナク即チ之ヲ取テ直ニ已ノ論說トシ又ハ之ヲ添削校正スルノ權ナク殊ニ之ヲ再ヒ刊行シテ發賣スルノ權ナシ思想傳播ノ一具ヲ買タリトテ著作迄モ買タリトハ云ヒ難シ

第二物ノ所有者ハ其物ノ產出スル利益ヲ収ムルノ權アリ著述者ノ所有物タル著述モ價直ヲ生ズルモノナラバ作者ハ其著述ニ就テ収益スルハ所有者ノ本權ニシテ他人ハ毫モ之ガ妨害ヲ爲ス能ハス然ルニ今書物ノ買人ヲシテ其書中ノ著述全体ヲモ買人ノ物ナリトシ再ヒ刊行ヲ許セシナラハ著述者ノ位置ハ如何ナル可キツ馬琴翁ノ歎ハ物カワ世ニ著述者ハ其跡ヲ絶ツベシ國ノ不幸ハ之ヨリ甚シキハナカルベシ專買特許法カ製造品ノ進歩ヲ増加シタリト云フハ諸國現ニ其例アリ或者ハ學者ニシテ金錢上ノ利益ヲ爭フハ其身分ニ不適當ナリト云フベシツハ又思ハザルノ甚シキナリ天下豈學者ハ餓死ス可シト云原則アラヤ法律カ著述者ニ金錢上ノ權利ヲ認知スルハ社會當然ノ道理ナリ

已上述ル所ノ理由ハ著述者カ言語乃チ演說ヲ以テ著作傳
播ノ方法トナシタルモ同様ナリ聽聞者ハ其演說ヲ筆記
スルコトモ勝手ナリ演說ニ就テ自己ニ材料ヲ得ルコトモ勝手
ナリ其大要ヲ拔擢シテ世ニ公ニスルモ穴勝チ禁スルコトニ
モ有ルマシ然シ演說シタル著作カ聽聞者ノ耳ニ入レハ其
著作全体カ聽聞者ノ所有物ナリトハ云ヒ難ク著作ハ素ヨ
リ演說者ノ所有ヲ離ル、コトナシ隨テ聽聞者ハ演說者ノ承
諾ナクシテ謾ニ其全体ヲ世ニ刊行スル能ハス殊ニ刊行ナ
ラバ著述者ハ他ノ形体ヲ採用シタルヤモ計ラレス然ラハ
演說者ノ承諾ヲ得スシテ刊行スル者ハ作者ノ本意ニ戻リ
タル所爲ヲ爲シタル者歐米諸國ハ慣例ニ於テ學校教師ノ
講義代官人法庭ノ演說說法者ノ說法代議人ノ演說ハ本人
ノ承諾ナクシテ聽聞者其全体ヲ刊行スル能ハストセシハ
其故ナリ總テ著述者ノ承諾ナク著作ヲ刊行スル者ハ諸國
皆テ僞板ノ名目ヲ以テ之ヲ罰ス
其他著述者權ノ作用カ實際ニ發スル模様ハ千狀萬態ニシ
テ一々枚舉スルニ暇アラス又其重ナルモノヲ舉テ云ハン
ニモ法律應用論ニ涉ルナレバ我輩此席ニ於テ述ルヲ欲セ

ス唯簡單ニ著述者權ノ沿革ヲ述マク欲ス

第三節 著述者權ノ沿革

凡ソ物ノ起ルハ各其因縁アリテ起ルモノニテ始ヨリ偶然
ニ生スルモノニ非ラス法律モ天地間ノ物ナレハ同様ノ性
質アルヘシ著述者權ハ尤モ其適例ト云フモ可ナリ開闢ノ
始メヨリ存在シタルモノニ非ラス世界ノ文物其度ヲ進メ
人々其要ヲ感スルニ至リテ發生シタルモノナリ其發生ヲ
促スニハ世間ニ二ノ事項アラザルヲ得ズ一ハ著作刊行ノ
容易ナルコト二ハ購讀者ノ數多キコト是ナリ此ノ二要素カ著
述者權發生ノ因縁ニシテ此二要素ナキハ著述者權ノ發
生ヲ致スノ因ナシ倍テ世間ニ此二要素ヲ起シ隨テ著述者
ニ權ノ發生ヲ促シタルハ歐羅巴ニ於テ活字板ノ發明ナリ
其發明ヨリシテ著作ノ刊行容易クナリ書籍ノ價ヲ減シ隨
テ購讀者ノ數ヲ増加シ著述者ハ其著作ニ就キ金錢上ノ利
益ヲ有スルニ至リシ故ニ此著作ノ主ヲ明ニスルノ必要ヲ
起シタリ左レハ著述者權ヲ發生シタルハ活字板ナリト云
フモ誣言ニ非ルヘシ
我日本ノ昔ハ知ラス封建時代ノ様ハ馬琴ノ歎ヲ見テ知ル

ヘク法律トシテ著述者ヲ保護シタルコトナシ明治五年文部省ニ於テ初テ出版規則ヲ設ケ同八年ニ太政官ノ布告ヲ以テ現今ノ出版條例ヲ發告セリ日本封建ノ時代ニ就テハ必ス耳新ラシキ事モアルベケレド余未タ其探索ヲ得ザルハ残念ナリ歐洲ニテハ沿革ハ漸々ニ進ミ來リタル様アリテ突然一朝ニ發顯シタル如キ人造ニ非ル故ニ先日本ノ本店ナル歐洲歴史ヲ述フヘシ

上ニ述ル如ク著述者權ノ世ニ出顯レタルハ頗ル近代ノコトニテ古代ニハ其形迹ヲ見ス上古文字ノ發明ナク歴史ハ人々ノ記憶ニ存シ子孫相傳シタル世ニ在リテハ素ヨリ著述者權ノ思想モアルヘキ筈ナシ文字發明后ハ寫字業ハ世間ニ於テ一ノ必要ナル營業ナリシハ疑ナシ然レモ寫字ハ多クノ時間ヲ要スルコトナレハ其成績ニ顯レタル書物モ隨テ高價ナリシコトハ理財ノ原理ニ照シテ明カナリ隨テ購讀者モ少ク今日ノ所謂偽版ノ憂モナキ故ニ著述者權ノ發生ヲ促スヘキ要素ヲ欠キタリ左レハコソ法律ノ元祖トモ言フヘキ羅馬律ニサヘモ一語一句ノ著述者權云々ニ及ビタルコトナキハ偏ニ此權ノ必要ヲ感ゼザリシニ因ルナルヘシ

羅馬滅亡後世ハ脩羅ノ域トナリ文藝ノ事ハ世間ヲ離レテ寺院ニ屏居シ寺院内ニ在リテハ稍其勢力ヲ逞シタル様ナレモ區域狹隘ナルカ故ニ未ダ著述者權ノ必要ヲ感ゼス其后世間モ稍治マリ秩序稍定ニ至リテ文藝モ曾呂々々寺院ヲ出テ諸國ノ王宮ニ這入り保護愛顧ヲ受ルコトハナレリ

倍テ千四百三十六年ニ今ノ獨逸國「マイヤンス」ニ於テ「グーテンボルク」ト中人活板ヲ發明セシヨリ文藝ノ事頓ニ一變シ社會ノ一隅ニ擯付サレシモノカ直ニ社會ノ主人公トハナレリ活板ノ佛國ニ入リシハ千四百七十年ナリ其以後佛國ノ各都府ハ活板所ヲ所持シ夫ヨリ書籍ノ出版大ニ増加セリ是時ニ當テ一番ニ難澁シタルハ寫字業人ナリ活版發明比ハ己里府ト「オルレアン」府ニ於テ一萬餘ノ寫字業人アリテ是等カ一時ニ廢業トナリタルコトナレハ活版所ト寫字業トノ間ハ競争ニ止マラズ寫字業者ノ一揆モ起リシ程ナリシ何ハ兎モアレ出版増加シ書籍其價ヲ減シ隨テ購讀者ノ數ヲ増シ其増加ニ隨テ著述者ノ數モ増加シ又隨テ社會改良說ノ根元ト迄ナリタルコトハ事實疑フ可ラス

是時ニ至リ已ニ著作ノ利益ハ唯名譽上ニ止マラザルヲ感ズルニ至レリ左レ往昔ヨリシテ存セザル權利カ一朝突然名目ヲ具ヘテ出顯スル譯モナク假令ヒ其權利發生ノ萌ハアルトモ尙多少ノ變遷歲月ヲ得サレハ其全形ヲ顯スコ能ハザリシナリ

千六百年代ニ至リ一ノ活版所ハ王ノ特許ト云名目ニテ一ニノ古書ヲ出版專賣スルノ免許ヲ得タリ是ソ著述者權ノ元祖ニテソアル當時古昔ノ寫本ヲ版刻スルニハ誤寫ヲ校正シテ其眞面目ヲ得ル等ノ事活版者ニ於テモ非常ノ學識ヲ要セシナリ其誤正刊行シタル後チ他ノ活版所カ直ニ又之ヲ出版スルルハ最初ノ活版所ハ骨折損ナルガ故ニ預メ王ノ專賣特許ヲ請ヘリ此特許ハ三年限トシ追願繼續スルヲ得タリ此特許ヨリシテ大部ノ古書モ出版スルヲ得シナリ去ナカラ此特許モ後ニハ弊害ヲ生シ果テハ世ノ中ノ苦情ノ種トハナレリ即チ千六百七十八年ノ比ニハ地方ノ活版者即チ書林ハ巴里ノ書林カ特許繼續ニ對シ不公平ヲ唱ヘ遂ニ一大訴訟トナリ夫ヨリ互ニ訴訟絶ヘス千七百二十年ニ地方ノ書林ハ一同シテ巴里書林ノ特許繼續ノ不公

平ヲ抗論シ年限後ハ出版ノ書籍ヲ社會共有物トナス可キヲ主唱セリ巴里ノ書林ハ事ノ容易ナラザルヲ察シ時ノ宗教法學者「デリクートル」ニ依頼シ答辨セシメタリ「デリクートル」ハ答辨ノ爲メ一ノ冊子ヲ著ハシ凡ソ人間働勞ノ結果ハ働勞者ノ所有ナリ因テ活版者カ誤正ノ働勞ヨリシテ得タル結果ハ永代其人ニ屬スベシト云主義ヲ公告シタリ本人ハ書林辨護ノ積ナリシモ豈圖ランヤ其說コソ著述者ノ論鋒トナリ暗ニ著述者權ノ存在ヲ示シ却テ書林ニ不利ヲ與タル根元トナレリ果ノ其後ニ至リ活版者同士ノ爭論ハ變シテ著述者ト書林トノ爭論トナリ著述者自ラ出版スルヲ得ル様ニナリ著述者權遂ニ勝ヲ制シテ上位ヲ占メ書林ノ權ハ第二位ニ落タリ佛國革命ノ後諸國ノ法律大抵著述者權ヲ保護シ今日ニ至ル前ニモ述ル如ク著作ハ一國ニ辟在セス學術ハ本國ナシト云諺ノ如ク容易ク國境ヲ越得ルモノナレハ著述者權保護ノ趣ハ各國同一ニスヘキノ必要アリ然ルニ其法律區々ニ各國異ナルガ故ニ文藝技藝工藝ノ人々各集會シテ屢々萬國協議會ヲ開キ同盟各國ニ一定ノ法律ヲ設ケンヲ希望セリ是即チ歐米今日ノ

現狀ナリ

第四節 結論

已上ノ歴史ニ就テ見レハ著述者ハ活版者ニ起リ更ニ進テ著述者ノ物トハナリシナリ世ノ中ニ事物ノ始マルハ矢張ケ様ノ運ビナルヘシ最初ヨリ完全面目ヲ具ヘタルモノハナカルヘク世ノ中ノ需用ノ切ナルニ隨ヒ漸々進テ面目ヲ具フルニ至ル即チ需用ノ切ナルト同時ニ人々之ヲ得ント欲スルノ剛情積リテ進化ノ跡ヲ顯ハス活版者カ得タル特權カ著述者ト變化シタルハ全ク著述者ガ自己ノ資格ヲ全フセント欲スル剛情ノ推積ナリ世ノ中ノ法律カ之ヲ是認シタルモ著述者一己ノ資格ヲ全フセシメンガ爲ナリ著述者權ノ性質ニ付テハ或ハ特別一種ノ權ト云ヒ或ハ所有權ト云ヒ其趣異ナレモ著述者一己ノ資格ヲ全フセシメント欲スルノ意ハ同一ナリ此主意ハ獨リ著述者權ノミナラス其他一切ノ諸權利ハ皆ナ此義ニ基クナレモ就中此ノ著述者權ノ沿革ヲ見レハ世ノ中ノ進路方向ハ已ヲ全フシ人ヲ達スルノ主義ナルベシ人々一ケ人ノ資格ヲ全フセント欲スルガ故ニ已ヲ敬スルト同時ニ人ヲ敬スルノ必要アリ隨

テ彼我ノ權全ク隨テ社會ノ調和ヲ保チ隨テ人々天然ノ知識ヲ發達スルヲ得ルナリ若シ己ヲ敬セズ己ヲ放棄シ己ヲ全クセザルノ人アラバ奴隸ノ制度ヲ養成スルノ人ニシテ競進ノ戰場ニ在テ敵ニ後ロヲ見セル人ナリ共同協力ノ社會ニ在テ社會ヲ脱スルノ人ナリ我輩ハ一己人ノ資格ヲ全フシテ社會存シ其資格去テ社會腐壞スルヲ信ズル者ナリ諸君ハ斯ノ文藝ニ進ムノ人ナリ我輩諸君ト共ニ我々一己ノ資格ヲ全フシ以テ天然ノ知識ヲ發達センコトヲ期ス講談會ヲ利用シテ諸君ニ注文スルコト如件

○

病氣ノ話

明治二十年十一月十九日大學通俗講談會ニ於テ

三宅秀講演

今晚ハ「病氣ノ話」ト云フ題デ御坐イマシテ少シ廣スギテ纏マリノ付カナイ様ナ題デ御坐イマス、既ニ幹事菊池君カラモ醫者ガ病氣ノ話シヨスルト云フノハ領分ノ廣イコトダカラ、自由勝手デアラウト申サレマシタガ今日醫學者カ精々病氣ノ原因ヲ研究シテ居リマシテモ前申ス通

リ領分が廣イノデ隨分ムツカシイモノデアリマス、其ノ
 オ話シヨマルノデスカラ成ルタケ諸君ノオ分リニナル様
 ニ私ノ力ニ及ブダケ極領分ヲ狭クシテオ話シスル積リデ
 御坐イマス

此ノ講談會ニハ常ニ理學者ノ講師ガ出ラレマシテモ又醫
 學者ノ講師ガ出ラレマシテモ大概器械ヤラ試薬ヤラ雛形
 ヤラ繪圖ヤラ種々ナ道具仕掛ケデ大層面白ク有益ナルコ
 ヲ講ゼラレマスガ私ハ今晚ハ器械モ試薬モ雛形モ繪圖モ
 何ニモ持ツテ出マセン、落語家デスラ扇一本ト云フコトヲ
 申シマスガ私ハ扇モ何モ無クテ出マシタ、又格別面白イ
 道具デモ御坐イマセンケレモ表式グラ井ハ隨分入用ナコ
 モアリマスガ其表モ今晚ハ不必要ト認メマシタカラ表式
 一枚カケズニオ話シヨスル積リデアリマス、極資本ノ入
 ラナイ題ヲ探シ出シタノデアリマス
 コレヨリ本題ノオ話シニ掛リマスガ物ニハ因果ト云フモ
 ノガアリマシテ因アレハ果アリデ因ト云フモノガアツテ
 果ト云フモノヲ生ズル譯デアリマス、其レヲ申シマスト
 此次ノ次ノ會ニ佐々木政吉君ガ病氣ノ原因ト云フ題ニテ

演ベラレルサウデアリマスト云フコトヲ私ハ只今コ、デ
 聞キマシタノデ私ノ申サウト云フコトガ幾分カ狭クナリマ
 シタ、併シ私ガ今夕オ話シヲ致サウト申スハ即チ果ト云
 フ方デ已ニ病氣ノ出來タ上ノ事デアリマシテ因ノ方デハ
 アリマセンガ成ルタケ佐々木君ノ話シニ重サナラヌ様ニ
 オ話シヨスル積リデアリマスカラ佐々木君ノ講談ノトキ
 ニモ澤山ニ聽キニオ出デニナルヤウニ願ヒマス

併シナガラ果ヲ言ヒマストキニハ少シハ因ヲ申サナイ譯
 ニハ參リマセン、故ニ今晚ハ矢張り病氣ノ原因ト云フ方
 ヘモ一寸ト這入ランケレバオ話シノ纏リガ付キマセンカ
 ラ漠然ト原因ノ所ヘモ立寄りマス、ソコデ病氣ト申スハ
 簡様ナモノデアルト云フコトヲオ話シタバカリデハ諸君
 モ態々オ出デニナツタ甲斐モアリマセンカラ病ト云フモ
 ノハ簡様ナモノデアルト云フコトヲ御會得ガアツテ病氣
 ニ罹ラヌ様ニシ病氣ニナツタラ治ホスト云フコトマデオ
 話シシマス方ガ利益デアリマセウカラ原因ニモ立チ寄ラ
 ナケレバナラズ治ホシ方ノ方ニモ立チ寄ラナケレバナリ
 マセヌ、併シ題ハドコマデモ病氣ノ話シデアリマス、

先ツ生死即チ生マレ死ニト云フコハ凡ソ生アル者ノ免カ
レザルコトデアリマスガ生キテ居ル間即チ生マレテヨリ
死ヌマデノ間ニ健康ト病氣トノ二ツガアリマシテ言ヒ代
ヘテ申セハ死ハ一ニ生ノ間ニハ健康ト病氣トノ二ツガ
ムリマス、病氣ト云ヘハ其説キ明シヲシナクテモ十分諸
君ハ御分リデアリマセウガサテコレハ決メ容易イコデア
リマセント云フコヲ申シマセウ、病氣ハ何カト云フコヲ
諸君ニオ尋子シマシタラ如何ナル御答ヲサル、デアリマ
シヤウカ先ツ物ニ表裏ト云フコガアツテ健康ノ裏ハ即チ
病ダト云ハル、方モアルカ知レマセヌガソナ答ハ誰レ
ニモ出來マス、其レデハ面白クアリマセン、左ラバ健康ト
云フモノハ如何ナルモノカト問ヘバ病氣ノ裏ト申ステム
リマシヤウカ箇様ナ答ヘナレバ誰デモ出來マセウケレド
モ病氣ト健康トノ領分ハ相連リテ離レズコチラガ健康ノ
領分デ、コチラガ病氣ノ領分ト云フ其領分ノ境界ヲ一足
履ミ出セバ病氣マタ一足退ケバ健康ト云フ其境界ニ至テ
ハ一向分リマセンモノテムリマス今社會ニ於テ禮、非禮
ト云フコガアリマスガ其ノ禮、非禮ト云フコハ全ク昔カ

ラノ仕習ハセトカ云フモノデ或ハ之レマデ禮ナリト思フ
テ居タコガ案外失禮デアリ又失禮ト思フタコガ禮ナルコ
ガアリマス、コレモ何か一ツノ極ツタ正理ガアリマシテ
其眞理カラ割り出シタモノデハナクテ畢竟極メ様次第デ
禮トモナリ非禮トモナルノデアリマス、其レ故病氣モド
コマデヲ病氣ト云ヒ又ドコマデヲ健康ト云ツテ宜イカキ
ノ様次第デ其領分ノ所ヘ榜示杭ヲ打チ次第デ少シ位ノ所
ハドチラヘ極メテモ宜イ様ナモノデス、若シ其境界ニ山
トカ河トカガアツタナラハ其レニ依テ區別ガ判然出來マ
スガ茫々タル野原デアツタナラハ至ツテ區別シ難イモノ
デアリマス、其ノ區別シ難イ譯ハ後ニ段々申シマスガ彼
ノ狂氣ヒノ所ヘ往クト余程區別シ難イモノデアリマス、
氣違ヒト健康ノ方トノ境界ヲ判然ト現ハシテ見セヨト言
ハレタナラバ精神病家モ實ニ困ルコデアリマス、丁度其
通りデ他ノ病氣モ健康ト病氣ノ境界ヲ判然ト示スコハ至
テ難イモノデアリマス、又病氣ト云フコトニ就テ問ヲ掛
ケタナラハ如何ナル答ガ出來マセウカト云フト病理學者
ト云フ専門家が病ト名クルモノト普通一般ノ名クル病氣

ト云フモノトハ異テ居リマス、丁度昨晚デアリマシタガ
 學藝雜誌ヲ見マシタ所ガ巖石ト云フ字カ書イテアリマシ
 テ其註ニ巖石ト云ツタラ、カチ々々シテ居ル堅キ石ノ様
 ナルモノヲ云フト素人ハ思ハレマシヤウカ地質學家ハ左
 ニアラス總テ地球ノ層ヲ爲ス者ハ砂利デモ砂デモ泥デモ
 皆巖石ト云フノダトアリマシタ、若シ此註ガ無イ時ハ巖
 石ハ只堅イ石トシカ思ハレマセン、其レト同シク病氣ノ
 話シト言タナラハ「何ダ病氣ノ話シカ、オレハ聞カンデモ
 知ツテ居ル」ト云フ方モアリマセウガ病理學者ノ説ク所
 ノ病氣ハ素人ノ心得テ居ル病氣ト大層異ツテ居リマス故
 ニ病氣ノ話シヲシテモ大層價値チツチガアラウト思ヒマス
 病氣ト云フモノハ如何ナルモノデアラウト云フ考ヘハ昔
 シヨリ今日迄段々變ツテ來テ居リマス即チ世ノ開化シ學
 問ガ進ンデ來ルニ從ツテ昔シノ人ノ病氣ノ考ヘト今日ノ
 人ノ考フル病氣トハ大ニ變ツテ居リマス、其ノ變ツテ居
 ル次第ヲ今晚御話シヤウト思ヒマス今日ハ斯ウ思ウガ昔
 シ斯ウデアツタト云フ其變リ工合ヤ又病氣モ昔ト今トハ
 多少變ツテ居ルモノニテ昔アツタ病氣ト今日ノ病氣ト同

ジヤウナモノカト云フト左様デナク、今日ノ病理學ノ法
 ヲ用テ研究シテ見ルト段々ニ病氣モ進化シテ行クモノデ
 昔トハ變ツテ居リマス夫故ニ昔ヨリ病勢ノ烈シクナツタ
 モノモアリ昔ヨリ弱クナツタモノモアリ昔シハ僅カノ數
 デアリシモノガ今ハ其數ヲ増シ今有テ昔シ無イ病氣ガ澤
 山アリマス、丁度古生物學者ガ掘リ出シタ獸ト同ジヤウ
 デ昔シアリテ今其跡ヲ絶チタル者モアリマス其ノコトモ
 少シオ話シシテ見タイト思ヒマス
 先ツ康健ト云フモノト疾病即チ病氣ト云フモノトノ區別
 ヲ一寸オ分リニナル様ナ例ヲ引イテ御目ニ掛ケマス、此
 ノ例ヲ引クトキニ化學者ナラ燧ガ何カ持チ出ストコデア
 リマスガ其レハ有リマセヌカラ理屈上デ御話シシマス、
 人ノ生命ヲ燃エテ居ル火ニ喩ヘルコトガ能クアリマス、私
 ハ「ラムプ」ノ火ニ喩ヘマセウ、此ノ燈火ガ明ルク燈ツテ
 居ルコトヲ以テ人ノ生命中健康ノ時ノ有様トシテ置キマ
 ス、此明リノ明ルク燈ツテ居ルノハ油ガアリ心ガアリテ
 明ルイモノト云フコトハ諸君ハ御承知デアリマセウカ、
 彼ノ心ハ主ニナルモノデナク唯油ヲ吸上ケル計リノ爲メ

デアリマシテ專ラ燃ルモノハ油デアリマス夫故ニ油ト空
 氣ガアレハ火ハ燈ツテ行ク、然シテ見レバ人間ノ命ハ先
 ツ飲食物ト空氣ガアレバ生キテ往カレルノデ丁度惡クナ
 イ飲食大氣ヲ攝ツテ居レハ火ノ明ルイ如ク人間ノ命モ平
 安健康デアルト云フノデアリマス、油ガ全ク無クナツテ
 仕舞フカ或ハ空氣ガ無クナツタ時ニハ火ガ滅スル即チ生
 命ヲ繫グ油ガ全ク盡キタ時ハ火ノ消ヘタ時即チ死シタノ
 デアリマシテ燈火ノ明ルクシテ居ル時ハ即チ健康ナル時
 デアリマス、此「ラムプ」^{マハリ}デ言ヒマスト周圍ノ穴ヲ少シニ
 テモ塞イダナラバイクラカ明リガ暗クナリマス、其レバ
 カリテナイ油煙ガ出テ火ノ色ガ赤クナツテ來マス、其暗
 クナルニ從テ油煙ヲ出スコ益々多クナレハ誰モ直ニ氣カ
 付クモノデ人間ナレバ最早少シ病氣ニナツタ時デアリマ
 ス、併シ數百アル穴ヲ三ツヤ四ツ塞イダトテモ素人ニ
 ハ分ランモノデ、イクラカ空氣ガ通ハズニ油煙カ立ツテ
 明リモ少シ、カ暗クナツテ居リマセンカラ能ク氣カ付キ
 マセンケレハ最早病氣ノ方へ一足履ミ込ンデ居ルノデ
 ムリマス、其レヲ皆知ラズニ暮ラシテ居ルノデス、私モ

今晚ハ少シ咽喉ガ痛クアリマシテ病人デアルトヲ承知シ
 テ居リマスガ仕方ガナイカラヤツテ居リマス、私ガ此燈
 火ヲ引合ニ出シテ見タト云フノハ假リニ例ヲ以テオ話シ
 ノ種ニスルノミナラズ明リヲ以テ人間ノ生命ニ比スルト
 云フコハ大層役ニ立ツコトデ其例ハ人間ノ健康ノ有様デ
 人間ノ生キテ居ルノハ化學的ノ作用デ食ツタ物ヤ或ハ飲
 ンダ物が体中ニ入りテ不斷化學上ノ變化ヲ爲シテ居ルモ
 ノデアリマスカラ畢竟我々ノ身体ハ化學的ノ製造場ノ様
 ナモノデアリマス、モウ一步進ンデ委ク言ヒマシタラ、
 體中ノ組織カ酸化シテ居ルモノト考ヘテ宜シイ程デアリ
 マス、其レデ私ガ「ラムプ」ノ明暗ヲ以テ健康ト疾病トニ
 比較シタノデアリマス、只其化學的離合ノ工合ガ常トハ
 變ツテ來ルカラ病氣トナツテ現ハレルノデアルト云フコ
 ヲ申シタノデメリマス
 病氣ト云フ言葉ハ二豎。膏肓疾病ナドト六ヶ敷申シマス
 又やまひトカナやみトカいたつきトカ又ハ恙ナド種々ナ
 名ガアリマスガ一々字義ナドヲ挾テ居リマセズ平日唱へ
 ル所ノ病氣ト云フ語ヲ以テ誰モ分ル言葉デアリマス故ニ

ツレニシテ置テ病氣ト云フモノハ如何ナルモノデアルト
 云フコヲ申シマセウ、病氣ト云フモノハ痛イトカ苦シイ
 トカ又何ニカ不快ノ感覺ガアルトカ又氣分ノ勝レヌコガ
 アルトカ何トカ心ニ不愉快ヲ感スルノヲ通常、病氣ト云
 ヒマス、併シ先刻モ申ス通り病理學者ノ言フ所ト素人ノ
 言フ病氣トハ少シ違ヒマスモノデアレバ病理學者ハ
 ドコマデモ仔細ニ穿鑿ノ居リマス故ニ少シニテモ常ニ異
 ルコサヘアレハ最早之レハ病氣デアルト申シマス、丁度
 「ラムプ」ノ通りデ火ガ少シ計リ暗クナリテモ學理ヲ以テ
 道具責メニ變常ヲ見出ス術カアリマス恰モ物理學者ノ測
 光術ヲ用フルト同様デアリマス其例ヲ一ツ舉ゲテ見マス
 ト能ク人々ニ少サナ疣トカ^{アザ}黒痣ガ出來テ居リマスガ少シ
 モ苦痛ヲ覺ヘマセ又故ニ身中ニ其様ナモノハ有ルカ無イ
 カ自分ニハ氣ガ付キマセ又位デアリマス然ルニ黒痣ヤ疣
 ノ如キモノガ出來テ居ルト病理學者ハ常ニナキ筈ノモノ
 ガ出來テ居ル故ニ最早病氣ト云ヒマス何ダカ無理ニ病氣
 ニスルノデアハナイカト言ハレマセウガ其理由ヲオ聞ナサ
 レルト成程ト云フ御會得ガ行クダラウト思ヒマス

又素人ノ目ヨリ見テ大層他人ト變ツテ居ル者ガアレバ
 之レハ素人ノ方デ病氣ト思ツテ居ルコガアリマスガソウ
 デ無イ場合ガ有リマス子供ノ時ニ怪我ヲメ指ヲ水車デ挾
 切ラレタトカ醫者ニカ、ツテ切テ貰フタトカ云フ人ガア
 リマスト片輪(畸形)トカ云ヒマスガ其ノ人ノ健康ニハ些
 シモ變リハアリマセンコレ等ヲ素人ノ方デハ形チガ變ツ
 テ居ルカラ病氣トカ何ントカ申シマスガ醫者ノ方デハ全
 ク健全ノ人ト申シマス又素人ノ方デハ産婦ヤ怪我人ヲ病
 人ノ取扱ニシマスガ之レハ實ニ長クナイコトデ怪我ト云フ
 モノハ外部^{ソト}カラ受ルモノデ小サナコト云ヘハ「とげ」ヲタ
 テルトカ足ヲ「スリムク」ト云フノハ病氣ノ中ニハ這入り
 マセ又婦人ノ産モ先ツ怪我ノ中へ入レテ宜シ怪我ハ全ク
 病氣トハ別物ニシテ置クヘキ者デアリマス何故怪我ヤ疣
 産ヲ病氣ニ爲ス方ガ能キカト云フニ動^ユモスレハ怪我ヲシ
 タ人ガ藥ヲ飲ミタガリマスガ若シ痛ミガ強イトカ熱ガ出
 タトカ云フ様ニ怪我カラ病氣ヲ發シタナラバ夫々ノ藥ヲ
 飲ムガヨイガ怪我ヲシタカラト云テ直ニ藥ヲ飲ンダ所ガ
 其怪我ハ愈ユヘキモノデアハリマセン怪我バカリノ時ニ

藥ヲ飲ンデモ利クモノデナイト云フコト一寸トオ話シシテ置クノデアリマス
 其レダケガ先ツ病氣ト云フモノハ如何ナルモノデアルト云フコトオ話シデ是ヨリ病氣ト云フモノハイツ頃ヨリ始マツタカト云フコト即チ病氣ノ起原ノオ話シデアリマス
 歴史ナドヲ見マスルト病氣ノ濫觴ダトカ云フコトガ書イテアリマスガ併シ其時ガ始メデアリマセン、歴史上ニ書キ載セタコトノ之レガ初メナノデ「人ハ病ヲ容ル、ノ器ナリ」ト云フコトガアリマスガ之ガ先キニ申シタ様ニ火ト申スモノガ燃ヘテ居レバコソ明暗ヲモ生シ又消滅モ致ス譯デ若シ世ノ中ニ火ト申スモノガ無ツタナラバ油煙ノ立ツコトモナク消ヘルコトモアリマスマイ、シテ見ルト人間ノ身軀ガ此世ニ現ハル、ヤ否ヤ最早其時ヨリ病氣ト云フモノガアルノデアリマス、故ニ歴史ニ載セタル所ヲ以テ起原トスルコトハ出來マセン、健康モ亦其通りデ我々ノ生命ノアル以上ハ始終何レ此健康カ疾病カノ中ヲ出ヅルコトノ出來ン筈デアリマス

サテ昔シカラ病氣ハアツタカラニハ其ノ病氣トハ如何ナルモノデアラウト云フ疑問ハ如何ナル野蠻人デモ未開ナル世ノ中デモ起ノ居リマシタト見ヘマス、其極未開ナル人民ノ病氣ノ原因ヲ考ヘルニ病氣ト云フ物ガ外部カラ体中ヘ飛ビ込ンダ様ニ考ヘテ居マス、今人ノ體ヲ國ト考ヘルト外寇デ隣國カラ責メ込ンデ來テ戰ヲ始メタト云フヤウニ考ヘマシタ、又外寇バカリデハナク内亂デ國內ニ謀叛者カ出來タト考ヘテ居リマシタ、サウシテ見ルト敵國カラ攻メテ來レハ相當ノ兵士ヲ以テ敵軍ヲ防ギ我國境ヨリ追出シテ仕舞ヒ又暴徒ナラバ之ニ相當ノ兵士ヲ以テ之ヲ鎮撫シテ仕舞フト云フ考ヘヲ持テ居リマシタカラ押シ込ンデ來ルモノハ如何ナル敵カト云フニ極古イ所ノ者ハ無形ノ者ガ外部ヨリ飛ビ込ンデ病ト云フモノヲ來タスト考テ居タモノデアリマス、後ニハ理屈ガ分ツテ有形ノモノト思ヒマシタガ昔ハ無形ノモノト考ヘテ居マシタ、又有形ノモノデモ狐ツキ或ハ「いぬがみ」ナドト云フモノガ來テ爪ノ間カラ這入ツテ病氣ニナツタトカ皮膚ノ間ニ入リテ「こぶ」ニナツタトカ申シマス、晋侯夢疾化爲「豎子」

曰彼良醫也必傷我也居膏之上[○]。膏之下[○]。奈我何無形ノモノハ
 神佛ノ罰トカ或ハ崇^タリトカ即チ前世デ惡事ヲシタカラ今
 生デ惡イ果ヲ得テ居ルトカ云フ様ニ神罰佛罰ノ爲メニ病
 氣ガ起ルト考ヘテ居リマシタ、故ニ目ニ見エヌ無形物デ
 ハ如何モ相手が分リマセヌ故ニ假リニ相手ヲ設ケテ疫病
 神トカ疱瘡神トカ、取り附イタ様ニ思ツテ居リマシタ現
 ニ昔ノ或ル書物ニ疫病神ハ池^イ河水中ニ居ルトカ云ツテア
 リマシタガ成ル程此等モ能ク云ツタモノデ今日ノ様ニ段
 ヲ學問ガ開ケテ來ルト現ニ沼ノヤウナ所ニ熱病ノ毒ガ澤
 山アルコトハ分リマシタ又疱瘡神ハ海ニ居ルト云ヒマスガ
 日本ハ島國デアアルカラ必ス海外カラ此病ハ傳來シタノデ
 アリマシヤウ又八丈島ニ來ナイノハ鎮西八郎ガ追ヒカヘ
 シタカラト云フコトヲ言ヒマスガ之レハ疱瘡病人ガ其處ニ
 往カヌ様ニ追反ヘシタコトヲ言ツタノデ何モ昔シバカリデ
 ナク今日デモ傳染病ヲ驅リ盡スニハ海陸ノ檢疫ヲ嚴重ニ
 スレハ終ニ消滅サスルコトガ出來ヤウト思ヒマス、疱瘡神
 モ古シ海外カラ來タカラ海ヘカヘメシマフコトガ出來マ
 シヤウ、今日理屈ヲツケレバ理屈ガアルガ只昔ハ學問ガ

足リナカツタカラ然^サウ云フコトヲ言テ居タノデアリマス
 前申ス通り有形物即チ狐ツキ或ハ「いぬがみ」ナドガ人間
 ノ体ニ這入テ來ルト云フコトヲ昔シヨリ今日マデ申シマス
 オ耻カシイ話シデスガ畏シコキ萬乘ノ君デスラ鶴ノ爲メ
 ニ御惱アラセラレタト云フコトモアリマスシ又頼光ガ土蜘蛛
 蛛ノ爲メニ惱マサレタト云フコトモアリマスガ此レモ決シ
 テ其頃ノ考ヘデハ無理デアリマセン
 崇リト云フコトニ付テハ不具^{カタラ}ノ兒ガ産レタトハ前世ニ鼈
 ヲ捕ツテ商賣ニシテ居タカラ其應報デ鼈ニ似タ兒カ産レ
 タトカ申スモノモアリマスガ是等ガ若シ眞ノ崇リデ必ス
 左様ナ子ヲ産ムニ定リタル者ナレバ今日牛ヲ屠ル人杯ハ
 皆牛ノ子ヲ産ム様ニナリマス、サウナレバ牧牛ヲヤメテ
 其ノ様ナル子ヲ造ル方ガ却テ宜キ商法ニ成リマス、不具
 ノ兒ヲ産ムノハ鰻ヲ捕ツタカラ又ハ龜ノ子ヲ捕ツタカラ
 ト云フコトハ決シテアル譯デアリマセン、不具^{カタラ}ノ兒ノ産レ
 ルト云フコトハ御婦人方ナドハオ聴キニナルノモ思マシク
 思ヒ召サレンカ話シガ此所ニ成リ行キマシタカラ序ニ述
 ヘマスカ妊娠中畸形ヲ見ルト其レニアヤカルナドト云フ

コハ決シテナイト云フコヲオ話シシテ置キマス、或ハ母ガ妊娠中ニ火事ヲ見ナガラ身體ヲ搔キマス腹ノ兒ニ痣ガ出來ルナド云フコヲ申シマスガ其ノ様ナコハアリマセシ、サウ云フコハ今日デハ開ケマシタガ歐羅巴人デモ往昔ハ言テ居タモノデ、ドコノ國デモ昔シハ御同前デアリマシタ、然シ崇リト云フコハ一人ノ体ニ計リ受クルトフノデナク一國ノ人民モ悉ク崇リヲ受ケ或ハ神罰ヲ蒙レルコガアルト云フ考ヘデアツタモノデ即チ流行病デ頻リ二人カ死ニマスト之ハ皆ナ神ノ崇リデアアル罰デアルト思ツテ居タノデアリマスガ去年私ノ洋行シテ居ツタ留守中ニハ惡疫カ大層流行シマシタサウデスガ昔ノ様ニ考ヘタ時ハ吾國人ハ何カヨクヨクノ罪惡ヲ犯サナケレハ去年ノ如キ流行病ハナカツタニ違ヒナイ、筈デアリマス然ウ云フ考デアリマスカラ畢竟神罰佛罰ト云フモノ、崇リナドヲ病氣ト考ヘテ居タカラ謝罪御詫ビサヘスレバ病氣ハ直ルダラウト思ツテ居タ其詫ビルコガ療治法デ或ハ加持祈禱、呪咀ナドヲ神符ヲ飲ムトカ御符ヲ、戴クトカ護摩ヲ燒クトカスレバ病氣ハ愈ルト思ツテ居タノデアリマス

其時分ノ人ノ思想デ言ツタナラバ病氣ハモトモト神佛ヨリ受ケタルモノデアアルカラ神佛ノ前ニ參詣シテ供物普施犠牲等ヲ供ヘオ詫ビヲシタナラバ愈ルト思テ居タノハ未ダ宜イノデスガ又其時分ニ已レハ大病テ寢テ居テ自身神佛ノ前ニ參詣シテオ詫ビヲスルコモ出來ヌ場合ニハ其妻子眷族カ代理ニ參詣謝罪スルコノ出來ル様ナ極便利ナル療治法ガアリマシテ其等ガ最モ行ハレテ居マシタガ今日ハ却テ不自由ナ世ノ中ニ成リマシテ代理人ヲ以テ療治ハ受ケラレヌ様ニ成リマシタサテ其レヨリ段々人間ノ智慧ガ進ンデ來マノ神佛ノ罰デ病氣ヲ發スノデナイト云フコニ氣ガ付イテ參リマスト何ノ爲メニ病氣ガ起ツタノデアルカト初メテ本當ノ原因探リノ方ヘ考ヘガ着イテ來マシタ、西洋流デ言ヒマスト種々綿密ナル疾病ノ原因ヲ說イテ居リマスガ之レハ後日佐々木君ガ委シク申サレマセウ、私共ハ西洋流ガ餘計臆臆ヘ染ミ込ンデ居リマスガ西洋醫學ヲ知ラズ一般ノ考ヘハ何ガ多イカト云フニ子供ノ時ヨリ老人又母親ヨリ授ケラレタルコガ余計染ミ込ンデ居ル様ニ考ヘラレマス故ニ矢張り支那流儀ガ余計這入ツ

テ居リマス、當節デハ儂麻質斯グラ井誰デモ知ツテ居リ
 マスガ疝氣ダノ癩飲ダノト種々支那流儀ノ病名ガ一般
 民ノ心ニ染ミ込ンデ居マスカラ今一般人民ノ從來知リ居
 ル疾病ノ考ヘニ付テ演ベヤウト思マヒス先ツ病ノ原因ヲ
 外感内傷ノ二ツニ分ケマシテ此外感ト云フノハ如何ナル
 モノカト云フニ即チ時候ノ寒クナツタ爲メトカ或ハ熱ク
 ナツタ爲メニ我々ノ体ニ外部カラ感作シテ來テ病氣ノ起
 ルト云フコヲ知テ來タノデ其レダケ學問ガ進歩シテ來タ
 微シデアリマス、其外感ノ例ヲ引キマスト風ヲ引ク（感
 冒）ト云フ言葉ガアリマス、英吉利デハ「ケッチ、コール
 ド」ト云フ言葉デアリマスガ寒サヲ捉ルト云フコデ其寒
 ノ爲メニ冒サレタト云フコヲ知ツテ居ル、神ノ崇リナド
 ト云フコハ最早人ガ言ハナクナリマシタ、風ヲ引イタカ
 ラ神ニオ百度ヲ上ルナド云フコヲ止メテ寒ノ爲ニ受ケタ
 病氣ナレハ何ツ爛デ一杯ヒツカケ又ハ熱イ盥飽ヲ一杯食
 ツテ寢テ温マリサヘスレバ治ルト云フ考ヘヲ出スヤウニ
 ナリマシタノハ其レダケ人智ガ進ンデ來タノデアリマス
 又醫術ニ取リテモ支那流儀デアリマスト療治スル時分都

合ノ宜キコガアル故ニ外邪トカ風邪トカ云ヒマシテ邪ト
 云フ者ガ体内ニ侵入シタ爲ニ病氣トナリタルモノト考ヘ
 其ノ敵ヲ攻メ出ストカ何トカ目當テノアル方ガ治シヨク
 汗ヲ取レハ外邪モ共ニ出テ去ル者ト看做シマス若シ邪氣
 ヲ繪ニカキタナレハ鬼ノ面ノヤウナモノデアリマシヤウ
 此風邪ガ重クナルト傷寒ト云フヤウナ文字ガアリマシテ
 之レハドウシテモ寒サガ敵デ神ガ敵デナイト云フコガ能
 ク分ツテ來マシタ、又中暑ト云フモノハ暑サニ中ツタト
 云フコモ分リマス、或ハ食物ニ中レハ食傷即チ食物ガ病
 ノ因トナツタト云フコヲ知ルヤウニナリマシタ、如何ナ
 ル工合デ暑氣ナリ寒氣ナリニ中ルト云フ其原因ノコハ佐
 々木君ガ次回デオ話シヲサレマシヤウカラ私ハ少シ計リ
 オ話シヲスルノデアリマス、マタ素人ノ言フ「かん」ニハ
 疝ニ甘ト云フ字ヲ書イタノト問ト云フ字ヲ書イタノトア
 リマスガ甘ト云フ字ヲ書イタ方ハ小兒ノ多ク甘イ物ヲ食
 フト此病氣ヲ起スト云フコデアレバ神ノ崇リト云フ頃ヨ
 リハ人智ガ進ンデ來タト思ヒマス、疝ニ問ノ字ハ別ナ意
 味デアリマスカラ今晚ハオ話シ致シマセン

夫等ハ病ハ外カラ來ルモノト云フヲ考ヘタキノコトデ其
 レカラ内傷ト云フハ國內ニ内亂ガ起ツタノト同シデ内々
 ニ傷レ損シヲ生シタル者ニテ内傷ト云ヒ又内損トモ申ス
 如何ニスレハ内カラ病ガ出ルカト云ヒマスト精神病ナド
 ヲ説キ明カスニ都合ガ宜クアリマス支那流儀デ云ヒマス
 ト七情ガ動クト病ガ發スルト云フノデ其實七情ノ動クノ
 ハ外部カラ種々ナモノガ來テ我々ノ腦裡ニ感シテ來ルノ
 デハアリマスガ之ハ耳ニ觸レヌ故ニ全ク内部ニ生ズル者
 ト考ヘマス七情ガ頻リニ動イテ來ルト氣違ヒノ様ナ病氣
 ガ起ルト云フノデアリマス
 ソレカラ癩飲ナドト云フ病氣モ矢張り体ノ中カラ發テ來
 ル様ニ考ヘテ居リマスガ癩ハとゞまる飲ハのむデアリマ
 スガ漢法家ニハ飲ノ字ノ付テ居ル病ガ多クアリマス又痰
 デアリマス痰ハ疔ニカサ子火ヲ書イタ字デ之ヲ支那流儀
 ニ言ハセマスト其痰ガ凝ルトこぶニ成ルト云ヒテ目ノ上
 ノたんこぶナドト俗諺ニモアル通りデアリマスガ此レモ
 狐ヤいぬガみガ皮肉ノ間ヲカケマハル癩トナルト云フ説
 ヨリハ、幾分カ進ンデ居リマス、又小兒ノ病氣ハ能ク虫ノ

せいデアロウト申シマスガ其虫ト云フモノハ如何ナル形
 ノモノカドシナニ見ユル虫デアアルカト云フニ今日動物學
 者ガ研究シテ其大ナル者ハ之ヲ肉眼デ見其小ナルモノハ
 顯微鏡デ見ルト云フ様ナモノデナク全ク空想ニ出テタノ
 デ蛔虫ノヤウナモノデモナクサナダムシ蠅虫ノ如キモノデモナク唯
 空ニ考ヘタモノデ體內ニ自然ニ涌キ出スモノト考ヘタノ
 デ水ノ中ヨリぼうぶらガワイタト云フヲ能ク言ヒマス
 ガ卵モ何ンニモ無イモノカラ出來ルコトハアリマセン、卵
 ガ外カラ這入ツテ其レカラ虫ガ生ズルト云フコトナラ眞説
 デアリマス、丁度其レト同シコト種々ナ毒即チ瘡毒ナド
 ノ様ナ毒ガ偶然体内ニワク様ニ考ヘテ居テ人カラ傳染シ
 テ來ルコトハ分ラズニ居タモノト見エマス
 先刻申シテ置キマシタガ氣違ノヤウナモノハ七情ノ動キ
 カラ病氣ニナルト云ヒマシタガ俗ニ「病ハ氣カラ出ル」ト
 云フコト素人ガ云ツテ居リマスガ自分デ病ダド心配シテ
 居ルト段々其レガ病トナツテ來ルト云ヒマシテ隨分アル
 コトデアリマスガ併シ何ノ病デモ皆ナ心ヨリ出來ルト云フ
 コトハアリマセン、氣鬱病ナドハ尤モ適例デアリマス又平

日飲ミマス所ノ酒ハ一名狂水ト申シマシテ誰レデモ酒ヲ
 飲ムト平日トハ違ヒ默ツテ居ル人モ頻リニ多言スル様ニ
 成リ外カラ狂ニスル原因ヲ送り込ムニ由テ一時氣違ノ様
 ニ成ル去レトモ常ノ人ガ酒ヲ飲ンデモサホドモデ無イガ
 氣違ヒニナリカ、ツタ人ガ飲ムト忽チ氣違ヒニナリマス
 世ニ酒亂ナド、唱ヘルモノハ大抵既ニ氣違ノ部類ニ入
 リテ居ル人デアリマシヤウ此ノ如ク氣違ハ健康ト疾病
 ノ境界ノ分ラヌ位ナモノデ氣違ヒノ所業ヲ爲サヌ間ハ
 氣違ヒデアツテモ氣違ヒタルコトハ醫者デモ容易ニ分リ
 マセン
 其次ニ癡ト云フコトコレモ疴ダカラ病氣ノ中ニ筭ヘ込ミマ
 ス常習ノ癡ヲ持病ト申ス人モアリマス無クテ七癡有ツテ
 四十八癡ト言ヒマスガ癡癡ナドト申スモノハ既ニ疴ノ附
 テ居ルノハ尤ナコトデ病理學者ニ論ジサセタラハ必ズ氣違
 ノ一種ニ屬シテ居ルト申シマスデアリマシヤウ
 世ノ中デ言ヒマス心系病デアリマス演劇ナドニモ此節デ
 ハ「妖怪」ナドト云フコトヲ止メテ神經病ト云ヒマスガ此字
 ニ付テ新聞記者ナドニモ少シ注意シテ貫ハナケレハナラ

又コトガ有ル心ト云フ字ト系圖ノ系ノ字ヲ書イテ心系病
 ト云フナラ怪談ヲ心系病ト申シテモ構ヒマセヌ然シナガ
 ラ西洋醫學デ申ス「神經病」ハ神ト云フ字ノ下ニ五經ノ經
 ノ字ヲ書クノデアリマシテ此神經ト申ス者ハ知覺ト運動
 トヲ司トル筋^{スネ}デアリマス故ニ其働キガ病ノ爲ニ惡シクナ
 リテモ痛ミガアルカ痿レルノミニテ決シテ「妖怪」ガ出
 テ來ル譯ハアリマセヌ心ハ心臟ノ意味ニテ心即チ精神ハ
 此所ニ舍トルト云フ考ヘヨリ病心ノ系ヲ侵シテ耳目ニ怪
 異ヲ認ムルト云フ譯デアリマス故ニ西洋流ニ云ヘハ怪談
 ハ精神病ノ一現象ニテ神經病デハナシ然シナガラ氣即チ
 心^{ココロ}ニ係ツタ病デアルニ依テ心ト云フ字ヲ用ヒ又系ノ字ヲ
 書イテ貫ヒ神經病デハナイト云フコトヲ區別スレバ醫者ノ
 方モ病理學者ノ方モ充分満足致スデゴザラウ
 昔シヨリ種々病氣ノコトニ付テ考ガ變ツテ居マスカラ昔シ
 ハ病ト致サヌ妖怪ト云フモノガアルト思フタモノガ今ハ
 無クナツテ心系病ト云フ病ニ變化シマシタ、夫レト同様
 デ世ノ中ガ進ンデ來ルニ從ツテ病理學モ開ク隨テ病ノ數
 ガ段々殖ヘテ來マシテ竊盜狂ト云フ精神病ガアリマシテ

頻リニ人ノ物ヲ盜ミタクナル病氣ニテツマラヌ物ヲ窃ミ
 タガリマス、又放火狂ト云ツテムヤミニ火ヲツケタガル
 ノモアリマス、又モツト可笑シイノハ訴訟狂ト云フノデ
 無茶ニ自分ノ方ニ利ヲツケテ訴訟ヲ起シ判事サン達ヲ迷
 惑サセマス、或ハ人ガ辱メタトカ人ガ己レノ權利ヲ侵シ
 タトカ云ツテ法庭ヲ煩ハス者ガアリマス、コレ等ハ昔シ
 ハ氣違ヒトハ思ツテ居リマセンデアリマシタガ今デハ
 其精神病ノ一種タルコトハ分リマシテ個様ニ病ガ殖ヘマシ
 タ
 凡ソ病ハ苦シイモノト定ツテ居ルカラシテ貧困ナルコトヲ
 貧ノ病ナドト名ヲ付ケルコトモアリマス又何カ流行スレハ
 矢張り病氣ニ喩ヘマス當節ノ様ニ彼所デモ此所デモ洋行
 スレバ之レハ何ンデモ洋行熱ガ流行スルノデアラウト云
 ヒマス、私ナドモ前年西洋ニ行キマシタガ「オ前ハ洋行熱
 ニ浮カサレタラウト云ハレマシタ又鐵道布設ガ流行ス
 レハ鐵道熱ト申シマス舞蹈ノ流行ハ眞ニ一ノ病トナリテ
 流行シタコトガ西洋ニモ一時アリマシテ今日デモ此病ニ罹
 ルルハ舞蹈病ト申シマス是レハ決シテ今日我邦ニ流行ス

ル舞蹈ヲ洒落ニ名ヅケタノデハアリマセヌ故ニ皆様オ笑
 ヒ下タサルナ
 サテオ話カ余リ長クナリマシタカラコレカラ先キ大詰
 メニ短メテヤリマセウ斯ノ如ク昔ト今ト病ト云フコト
 ノ考ヘガ變化シテ來マシタ昔シハ神ノ崇リトカ或ヒ
 ハ外部ヨリ同シテ來ルモノト云フ思想ガ今デハ全ク變シ
 テ來マシタ、誰ガキメマシタカ知リマセヌガ病ノ數ハ四
 百四病ト云フコトデアリマシタガ此レモ病彼レモ病ト云ツ
 テ病名ガ澤山附キマスカラ次第ニ其數ヲ増シテ五百五病
 デモ六百六病デモ尽キヌ様ニナリマシタ此ノ如ク病氣ハ
 絶ヘズ其數ヲ増ス様ニ見ヘテ後世ノ者ハ甚タ迷惑ナル様
 ニ見ヘマスガ其實ハ昔シ病デナイト思フタモノニ病名ヲ
 付ケテ一病ト爲シタノデ別ニ病ハ殖ヘタノデアリマセ
 ン却テ前申ス如ク昔シアツタ病デ今日無クナリカ、ツタ
 病ガアリマス、又已ニ今日ハ其跡ヲ絶チテ仕舞ツタ病氣
 モアリマス、故ニ今日我々が醫者ヤ衛生家ガ骨ヲ折ツテ
 居リマスハ只一人ノ体ニ付タ病ヲ治ホスコトナク我邦
 ニ今迄アツタ病氣ハ其勢ノ段々輕クナリ往ク様ニ致シ其

勢ノ挫ケタ者ハ全ク其跡ヲ絶チテ國內ノ病氣ニ根切り療治ヲ施ス工夫ヲ致シ居ル譯ケテアリマス、故ニ皆様前申シタ様ニ病氣ハ「ラムプ」ノ火ト同ジコト少シ明リガ暗クナツタナラバ此レハ少シ病氣ガアルト考ヘテ直チニ醫者ニ診テオ貫ヒナサレ病氣ハ輕イキニ治サンケレバナラヌ十分ニ衛生法ヲ守ツテ行カナケレバナラヌコトハ今晚私ガ改メテ言フコトデモアリマセンガ此理屈デ推テ行ツタナラバ終ニ病氣ノ種ガ尽テ醫者ハ食ヘナクナルカ分リマセンガ兎角全國ニ無病健全ナル人が澤山ニナルコトヲ望ミマス病ノ古今變遷シタルコトニ付キテ説キ明シヲ致ス筈デアリマスガ時間ガ少ナクナリマシタ故ニカイ摘ンテ申シマスガ其理ヲ説クニハ病ノ原因ハ生物デアルト云フコトヲ發明セヌ前ニハ説キ明カスコトガ出來マセンデアリマシタガ近年ニ及ンデ即チ病毒ト云フモノガアル其ノ毒ガ生キ物デアルト云フ大發明ガアリテ以來ハ種々ノ虫モ發見セラレ又「バチルレン」トカ「バクテリア」トカ云フ生キ物モ發明セラレテカラ此物モ一生物デアルニ由テ世ト與ニ變遷シ盛衰消長スル故ニ病モ亦變遷スルト云フコトガ知レ隨

テ療治法モ又之ト與ニ變遷シナケレバナラヌ譯デアリマス、此病毒ノ變化ニ付テ委シクオ話シスレバ隨分面白いモノデアリマスケレモ咽喉モ甚ダ痛クナリマシタカラ今晚ハ止メテ置キマス又今晚ハ後回ニオ預ケニ致シ置カフト云フノハ病氣ト云フモノハ生体ノ化學的變常デ現ハルルモノデアアル、故ニ理學的化學的ニ之ヲ治ホスコトガ出來ンケレバナラヌ故ニ之ニ用フル醫藥モ亦化學的ノ働キニ依テ利クモノデアリマス、實ニ我々ハ有難イ世ノ中ニ生レマシテ病ノ原因モ追々明カニ分リ之ヲ除ク方術モ功手ニナリテ居リマスレハ尙ホ後日再ヒ諸君ニオ目ニカ、ルトキニ其御話シモ致スコトシテ今夕ハ此ニテ終リマス

○ 硫黃島 十二月二日第一高等中學校ニ於テ演説

(抄録)

第一高等中學校教諭 松原新之助

嚮キニ余ハ幸ニ火山列島巡航ノ好機ヲ得去月一日瀛船明治丸ニ割シ横濱港ヲ發シ三宅島八丈島鳥島小笠原島等ニ回航シ終ニ硫黃島ニ達シタリ硫黃島ハ即チ火山列島

ノ一ニシテ東經百四十一度十九分北緯二十四度四十六分ニ位ス其他二島アリ其硫黃島ノ南ニアル者ヲサン、ヲトガスチノ一嶋ト云ヒ東經百四十一度二十分北緯二十四度十四分ニ位ス同北ニアル者ヲサン、アリサンドロ島ト云ヒ東經百四十一度十一分北緯二十五度十四分ニ位ス此三島ヲ總稱ノ火山列島ト云フ抑々今回ノ渡航ハ硫黃島殖民ノ計畫ヨリ起リタルコノ由ナレモ余ハ始メヨリ敢テ此殖民ノ成否ニハ論ナク偏ニ洋中島地ヨキニツクアイランドナル硫黃島實驗ノ目的ヲ以テ便ヲ此渡航ニ依リタリ去レバ以下述ブル處ハ單ニ硫黃島ノ調査ノミニ止マル諸君幸ニ之ヲ諒セヨ抑々島ト稱スル者ハ水中ニ離立スル小陸地ノ總稱ナレモ其生出ニハ三種ノ別アリ乃チ一ハ大陸ノ中一帯ノ部分海水ノ通ズル處トナリテ其一部ノ離立シテ島地トナリタル者即チ日本、セーロン、ボルネオ、マダガスカル、タスマニヤ等是レナリ一ハ大陸ノ大部水中ニ沈降シ纔カニ其一部ヲ遺殘スル者即チニューゼーランド、ニューカレドニア等是レナリ一ハ新タニ洋中ニ生ジタル者ニシテ所（謂洋中島地）其高キハ必ズ噴火ノ作用ニ因リテ生ジタル

者其低キハ珊瑚洲ヨリ成レル者ナリ

島地ニ存スル處ノ動植物ハ前ニ述ベタル大陸ノ一部ヨリ成リタル二種ノ島地ニ於テハ舊來其大陸ニアリタル者ヲ遺留スルハ勿論ノコニ即チ日本ノ動植物ハ大抵近方大陸ノ者ト大異ナキモ此例証トナスニ足レリ然レ其種類ノ追々減少スルカ或ハ以前連續シタル大陸ト異ナリタル種類ノ或ル事由アリテ増加スルコアリ例令バ英國近方ノ島地及ビシ、リヤ島等ノ如シ又大陸ノ沉降ノ一島地ノ遺殘シタル者ハ稀レニ他地方トハ大ニ異リタル者ヲ存スルコアリ是レ特ニ此島地ノミニ遺留スルヲ以テナリ例令バワースタラリヤ、マダガスカル、セーロン等是レナリ然ルニ所謂洋中島地ハ從令ヒ其古キ者モ恰モ高山ノ動植物ト同シク自ラ一種ノ定リアリ乃チ其幅員ノ比例ニ於テ之ヲ平陸ニ視ラヒバ同一ノ面積上ニノ島地ノ動植物ハ其種類ノ數極メテ稀少ナリ而シテ其種類各個ニ就テノ蕃殖ハ平陸ニ比シテ却テ多シ又動物ハ哺乳動物蝙蝠ヲ除キト水陸並生類ヲ生ズルコナク動植物皆大抵近方ノ島地ト其品類ヲ同フセザル者多シ是レ蓋シ其傳フル處ノ原地ヲ異ニスルノ証トナスベシ

火山島珊瑚島共ニツノ古ルキ者ハ漸次多クノ動植物ヲ産

太平洋ニハ各島類ル異種ノ動植物アリ是レ其各島及ビ

火山島珊瑚島共ニツノ古ルキ者ハ漸次多クノ動植物ヲ産スレト新シキ者ハ必ス少ナシ纔カニアル者モ近接ノ地ヨリ或ル事由ニ依リテ移轉シタル者風潮若クハ鳥類ノ羽翼者ニ過ギス等ニヨリテ移轉シ來ル者ニ

珊瑚島ハ火山島ニ比シテ常ニ動植物ノ少キ者トス共ニ生出甚タ新シカラザル者ニ就テ云フ夫ノ南洋又ハ印度洋ニアル珊瑚島ノ中最モ生物多シト稱スルキーリングアイランドモ僅カニ廿種十ニ多ク例令バマデラ、アツセンシヨン、セントヘレナ、フィデーアイランド、カラバゴ列島ノ如キハ頗ル動植物ニ富メリ

序ニ云フ凡ベテ太平洋ニハ火山島甚ダ多ク他ノ海洋ニ其比ヲ見ズ且ツ北海ニアル島地ハ動植物ノ種類ニ於テ特殊ナル者少ク大抵大陸ト大異ナシ是レ大陸ニ近接シ且ツ植物種子ノ如キモ移轉自ラ容易ナルコアルニ由ルベシ大西洋中ノ島地ハ北海ニ比シテ動植物ノ種類大陸ニ異リタル者アリセントヘレナ、アゾリヤ島ノ如キ是レナリ印度洋ノマダガスカル、ムスカリ島等亦然リ唯

太平洋ニハ各島頗ル異種ノ動植物アリ是レ其各島及ビ大陸トノ距離極メテ遠キヲ以テノ故ナラン以上ハ島地ノ定義ニ就テツノ一二ヲ擧タルナリ是レヨリ進ンデ硫黃島實驗ノ模様ヲ述ベントス

余ガ硫黃島ニ達シタルハ去月十日午西九時ニシテ先ヅ船中ヨリ之ヲ望ムニ島ハ北北西ヨリ南南東ニ延ビ兩端小山各一坐アリ其頂上ハ皆稍ヤ平ラカ而シテ兩山ノ中間ハ地勢平低滿島一ノ喬木ナク地膚禿赭シテ幅員亦甚ダ廣カラズ北方ノ山頂ヨリハ一縷ノ蒸氣ヲ發セリ一見シテ島中ニハ飲水アラザルベシトノ想像アレバ同行中殖民希望ノ連中ハ未ダ島ニ上ボラザルモ先ツ已ニ幾分カ失望ノ顔色アルヲ見タリ加フルニ港灣ナキガ故ニ船ヲ寄スルニモ極メテ困難ヲ感シ且ツ此日ハ天氣靜穩ナルニモ拘ハラズ驚波怒濤山崩電撃危險ノ甚シキ容易ニ近ヅキ上ボルコ能ハズ辛フジテ「ボート」ニ隻ヲ下シ一行五十人之ニ乗ジテ纔カニ島ニ上ボルコヲ得タリ一隻ハ終ニ波濤ノ爲メニ覆ヘリ島ノ長サハ凡ソ二里余幅ハ均シカラズ廣キ處ハ一里許狹キ處ハ一二丁ニ過キズ北方ノ小山ハ今猶ホ噴火シテ硫氣充滿

草木共ニ生セズ唯一面ノ赭山タルノミ山麓ハ黑色ノ圍石
 疊々積ミ重ナリ恰モ波除ケノ石垣ヲ築キタルガ如シ是レ
 等ハ皆玄武石ノ一種ナリ其海ニ面セザル處ハ灌木叢生シ
 容易ニ行クベカラズ且ツ伐リ且ツ進ミ纜カニ過グルコヲ
 得タリ漸ク南シテ地漸ク狹ク小地峽ヲ以テ島ノ南部ト連
 續ス此頸地ニ當ル處ハ細砂ヨリ成リ地上ヲ匍匐スル蔓草
 類ヲ疎生ス且ツ頸地ニ接スル山麓ノ灌木ハ皆樹皮ノ刷落
 セルヲ以テ察スルニ波濤ノ大ナルトハ潮水容易ニ此間ヲ
 打越ユルナルベシト思ハル

南方ニ位スル小山モ元ト噴火山ナリシコハ明カナレモ今
 已ニ烟ヲ絶テリ山上少ク灌木ヲ生ズ南ニ至ルニ隨ヒ漸ク
 多シ蓋シ該島ハ生出甚ダ古ルカラザル者ト思シク余ガ一
 夫ヲ役シテ採集シタル植物ハ僅カニ三十一種二十八屬二
 十一科ニ過キズソノ中内地ノ者ト同種ナルハ少ナケレモ
 概子小笠原群島ノ者ト大異アルコナク且ツ其種類ノ多カ
 ラザルハ已ニ前ニ述ベタル島地ノ定義ニ違ハザルヲ知ル
 ベキナリ

動物ハ夫ノ島地ノ定義トシテ哺乳動物蝙蝠ヲ 水陸並生類

ハ絶ヘテ之ヲ産セズ鳥類ノ中アホウドリ 信天翁及ヒ小笠原島方言ノ
 所謂ヲサドリ英名 ハ極メテ多ク其群集幾千ナルヲ知ラ
 ズ信天翁ハ即チ孚卵ノ期ニシテ雌ハ皆伏巢中ナリ此鳥ハ
 性愚ニシテ人ノ極メテ之ニ接近スルモ更ニ恐懼ノ模様ナ
 ク杖ヲ舉ゲテ輒ヤスク之ヲ撲殺スルコヲ得ベシ伏巢中ノ
 雌鳥ハ人ノ手ヲ其懷ニ入レテ卵ヲ奪フモ嘗テ之ヲ感セザ
 ルカ如シ蝙蝠食果類 ハ頗ル大ナル者アリ其他鷹ウグヒス、
 メシロ、ヒヨドリ等アリ水族ニシテ余ガ採集シタル者ハ
 介類十七種十六屬十六科ニシテ其他フヂツボ、ウニノ類
 二三種ナリトス右ノ中介類ハ皆空殻ヲ拾ヒ得タル者ニ係
 レバ其果シテ該島地近方ニ生ズル者ナルカ將タ波濤ノ爲
 メ遠方ヨリ打寄セラレタル者カハ殆ンド之ヲ詳カニスル
 コヲ得ズ

海濱ハ概子細沙ニシテ其上層ハ稍ヤ大ナルフェルスパル 長石ノ結晶ト
 輕石ノ碎片トヨリ成ル海水ハ英人キング氏ノ報告ニヨレ
 バ此邊ノ海ハ殊ニ甚ダ深シト云フ今回島ノ西方ニ於テ一
 所東方ニ於テ一所ヲ測リタルニ西ハ八十尋東ハ五十五尋
 アリ其温度ハ正午八十一度午後四時八十二度同八時八十

氣中温度正午七十九度午後四

研究の覺

氣中溫度正午七十九度午後四度時七十七度同八時七十六度 水底ハ赤色ノ粘土ニシテ海濱ト同質ノ細沙ヲ混ゼリ蓋シ此噴火山ハ水面ヲ抜ク甚ダ高カラザレ 海面ヲ抜ク 六百四十四尺 近方海水ハ非常ノ深サヲ有スルト云ヘバ水底山趾ヨリ算セバ蓋シ富士山ニ比スルモ敢テ優劣ナカルベキナリ

序ニ云フ洋中火山ノ生出ニ二様アリ一ハ初メ一ノ火山ヲ顯ハシ漸次其周圍ニ生スル者一ハ漸次長ク列ヲ爲シテ顯出スル者是レナリ伊豆諸島中ノ火山ハ皆此列ヲ爲ス者ナリ硫黃島モ現ニ新舊二火山アリ而メソノ所在ノ模様ヲ見ルニ此レ亦伊豆諸島中ノ火山ト同シク漸次列ヲ爲ス者ト察セラル

右述ブルガ如キ景況ナルヲ以テ該島ノ殖民ニ適セザルハ言フマデモナク別ニ好目的ナキヲハ已ニ諸君モ諒スル處トナリタラント信ズ唯々余一己ガ此航海ノ利益トナスハ所謂洋中島地ノ實驗ニシテ此レハ則チ得ル處敢テ少シトナサズ雖然是或ハ遼東ノ豕タルヲ免レザルベシ唯々諸君ノ高教ヲ仰グヲ願フノミ

○

研究の説

明治二十年十二月四日大學通俗講談會に於て

中澤 岩 太 講演

諺に「習ふよりは慣れろ」といふことがあります。人もし習ふたるところを皆が皆迄習ふ通りに出來ますれば百人が百人皆ものしりになるに違ひはなけれどどふも通常の人は唯習ふたばかりで直に忘れますと多くて誠にあひにくなものでもあります。但ししらべものをして覺たり或は研究して知たことなれを終身忘れることはありませぬ。ぬりれで忘るればもうろくでもしたと云ふものでせう。甚だ奇な例を擧げるやうですがあなたがたの中でどなたでも田舎で百姓に道を尋ねなされると「左に行つて右へ行つて橋を超へて右の方へ真直に行つて突き當つて左へ云々」と丁寧と言つて教へて呉れます。併しりの通り行けるものは實に稀れであります。多くは直に忘れるもので忘れると云ふ事は早いものであります。若し又この一つ橋から淺草寺まで行ふと思ひ立つときはどこを通つてどう行くと豫め考へるでもなく足に任じて

行きますと、つひく行かれます但し淺草寺へ行く道筋には能く慣れて居られるからのもであります百姓に聽いた田舎道は僅か三分時をかりでつひ忘れるものなれども一ツ橋から淺草までの道は考へる程の事もなくて行けます慣れたことは強ひもので三ツの子供でも三度の飯事は忘れませぬ人の智識が殖いて來るのもこれで殖いて來るのでその人の生長に就て申しますれば六ツか七ツの子供が小學校に入つたとて之は研究して物を覺わると言つてもうれば出來ないをだから教員が教場で同じことを幾度も々々やらして教へ夫て慣らします中學校ではもう教場で繰り返して讀たり同じを幾度も習はせるとは多く止め其の代りにハ自宅にて復讀を云ひ付け時々試験等をして獎勵したり且つは之をためします大學校になると學生に其責任を全く任してしまつて教へたことを繰り返すなどといふことはしませぬ中學校から大學校に這入つたものは繰り讀みをしなければならぬといふことも知つて居るし且つは復讀に慣れて居りますれば無利に勧めずともよく致しますりこで大學校の學生になりますと已

に習つたことをかりを繰り讀みするでなく習つたことから自分で考ひ出し又は種々の圖書を參考して習はない事迄も調べだしますここで研究と云ふ事が出るので蓋し斯く申せば研究と云ふとは大學の學生に限る様なれども之は僅かに一例を舉げたまでにて小學校で繰り讀みをさせられるのも中學校の復讀も皆研究の中でありませぬ何人でも多少の研究は出來るものであります今日の演題は研究の話といふ奇な題でありますが之はあとの外山さんのやうに六ヶ敷議論をするなどといふことでいなくて雑話の積りで話をするのであります今申した通り研究ハ年齢の長幼にも智識の多寡にも關係せず出來るもので其の研究の仕方にも種々ありて、本を讀むものもありまた實驗室で試験をするものもあり、また佛僧のやうに黙つて坐つて居て考へるものもあります其の中で何れの仕方がよろしいか夫れは研究の次第に因つて定む可きものでありますやう俗に餅屋は餅屋といふことかあるから私は化學の部類の研究に止つて外には出ない積りであります。

化學と云ふ學問は學で見ると面白^いものであります、面白^いと言つてもどういふ面白^い味かといふに茲にコップがある此のコップは何で出來て居るか化學上で分析して見れば判然とするまた其成分を合せてこれをコップにすることが出来る位の面白^い味のあるものです併し化學は唯講議で習ふとは余程むづかしく是にハ數字もあり又式もありますから凡てアンキするとは到底出來ないことで之を悉く覺へるには實地に行ふて漸々に覺へるより外に仕方がないものです故に化學にハ研究と云ふとが必要なものでありませ。

りれから段々化學の道理に精敷なり別けても製造化學と云ふ一別派に這入て見ると此のコップを拵る所縁位は朝飯前の仕事です、^ろここで研究するのには何の目的^がありて其目的^に達するのを希望するでハありませやうがこの目的^にハ色々ありませうが併し確かな目的^が必ず要用だと云ふ譯けでもありません、^{随分}ぼんやりとした眼先の知れざるをても其の研究の途行には種々の事柄に付て樂みが出て來て大きな目的^を着けると着けぬとに拘らず面白

味を覺へますとがま、あります例令は碁打が碁を打つにも上手に成ると負けても勝つても敢て苦とせず碁を打間に特別の樂みがあるさうです、弓を射る人に聞くと下手は百本射つて百本中るを目的として居ますが上手な人は弓の射風とか射前とか云ふて又奇妙な樂みが這入つて來ますらうです

茲に研究最中には云ふに云はれざる樂みがあるといふ一話をいたしませう方今獨逸國の府でハイデルベルグといふ所ハ中等の大學校がありまして、^ろここに今年八十六か七よなられる年の寄つた先生が一人居られます矍鑠たる老人で其の名をブンセンといひまして^ろの人の専門から言へを私どもの仲間でありますが年齢の長幼と智識の多少から申しますと我々の大先生でありますが其の人が生年の頃或る別嬪と婚姻の約束が出來て「何月幾日^は午前の十一時ごろに寺に於て婚姻の式を行はう」と言つて約策をしましたが娘さんの方では立派な粧をして「遅くなる^{とい}けな^い」と言つて十時ごろから寺に這入つてブンセンの來るのを待て居ましたが十一時になつても十二

時になつても三時になつても四時になつてもブンセン先生やつて來ないから家へ人を遣して親はせると先生はどこへ行つたか居ないといふので娘の方では大層腹を立ててすぐ家に歸つてしまふたと云ふとさてブンセン先生はりの日の朝から實驗室で小さな試験を始めて居たが其の試験も面白みが付て時間の過るのにも心付かず聽て時計を見ると午後の六時であつたから氣が付て驚いて寺へ行つて見ると娘の方は怒つて歸つてしまふた跡でありましたればりこでブンセン先生の曰く婚姻といふものは、めんどくさいものだとりれきり其の後は婚姻をせず今日でも矍鑠たる老人で無妻で居りますこれの研究が面白くつて婚姻を忘れた話です。

りれからは子を忘れたと云ふお話しだが是も同じ大學校の二先生で二才か三才にならる、小兒を一人持てる人だが或る日家の奥方は、なにか聞くつて先生に小兒のもりを依頼したとがありまして先生は何専門であつたか書籍を多く讀て研究する流議で毎日、余間あれば眼を書上に置くと云ふ位なるよ其の日は先生、子を預つたと

故初めの中は丁寧にもりをして居たがさて小兒と云ふものはもりをして相手になると一時静めになるもので先生ハ之れでは書を讀むとが出来ると本を手に取り上ると小兒ハ泣き出す學者と云ふものは兎角此の様なる俗事にうとひもので漸んど到感せられしがうこで書籍を讀みながら小兒を泣かせないやうにすることは出来まいかと色々考へて遂に小兒を車に乗せて之を引ながら書を讀みますると小兒も泣きませぬ書を讀みます事が出来て大に便利となり先生も一時ハ大喜でした然し車を引くだけ其の方が氣掛りになりましたして充分讀書に心をうばはる、と云ふ程に至りませぬので車の紐を先生の腰に着けて歩るきながら本を讀み車ハ先生の歩に隨て轉じまするので小兒も遂に安眠して静になり先生も順て讀書に心を奪はれて居りましたちよふど其時大學校でカランカランと時間鐘が鳴ります先生は慣れたとて之れにハ氣力付今迄讀で居た本を持つたなりに學校へ向て行き學校の入口の段を上がらうとした時何か腰を引ツ張る重いものがあるからふりかへり見たら腰に小兒の車が着いて居たとい

ふことであり、新築な學で研究心を奪はる、と最愛學士會完の完長を動かして入心マレウラフカニハ事

ふことでありませ斯様な譯で研究に心を奪はるゝと最愛の妻子をも忘れる程な面白くてたまらない位な楽しみがあります、私どもはまだういふ面白味は知りませぬが面白味のあることは信じて疑ひませぬ

さういう例を以て見ると研究の樂みは言ふにいはれないもので之に掛ると心配も苦勞も何も乎も世間のことなどは打ち忘れてしまふものと見えます。して見れば自分が一生懸命に本を讀んで居る隣トナリで面白き本を讀まれても又は新聞を讀まれても差支ないやうになりませう。さういふ風に實ミが入つて研究すれば前サキに大きな目的が在るの急で目的に達しようの國の爲親或は身の爲と云ふ考へなくとも面白くつて仕様がな一つの道樂で。西洋にも斯の如き道樂者がありまして終に大發明を致したとがま、あります是が爲になる道樂仕事だから親の代に考へ始めて子の代に、しをうせたの父先生の代に考へて弟子の代に至つて考へ付いたといふやうなとがあり又は考へ初てから三代も四代も経て其の事が出来るやうになるのであります。今一例を擧ぐれを千七百四十年でブロイセンの

學士會院の院長を勤られた人でマルクグラトフといふ博學の聞のあつた人でこの人が蕪カハラの一種から砂糖を採ることが後世に至つたら出来るだらうといふ考へを起したとがありましたこれが孫曾孫ひこの代でなく其の弟子アックカールドといふ人が五十二年の後に至つて糖菜から砂糖を採つたといふことであります。但し五十二年の間考へたといふもので素よりうれのみよ係つて居つたのでありますまいがやはり研究道樂から出來た結果でありませう。

今チヨイト驗究の致しかたよ付きまして尙一言致しませう其の法方を分別しますれば集成法と分析法との二法があります此のガラスのことに付いて其の兩法にて研究致しますれば即ち化學上の分析法に由り此のガラスハ何と何と幾分つゝ含有すると云ふとを發見するのハ分析法の致方で又何と何とを幾分つゝ合せて之を溶融すればガラスとなること云ふとを知るは集成法の致方でありませ凡て研究よは此の兩法を等しく行ふとが出来れば研究か確かになり面白みを一層増すもので化學上の研究にハ多く此

の二方を行ふとが出来るので化學と云ふ學問は面白ひ學問だと云ふのです此の水でも化學上で分析すれば水素と酸素とになります若しまた酸素と水素とを集成して水にすることも出来ますればうこで前の分析が眞實か如何やと確めるとが出来て研究が信に確實になります集成分析の兩法備はらされれば樂が少ないと云ふ一例を擧げを或る人が自分の家を建てることを、もくろんで間取の工合から用財の取合せから何から何までシツカリ家を建てるまでに考案して樂んで居りましたが折悪敷も此人の貧乏であつたから建てる事が出来ないで褒める人もなく爲に分析法の樂みだけで集成法の樂にはなりませんんだ然るに化學には多く兩方を行ふとが出来すれば金満家が家を立て人にも賞褒せらるゝ程の樂がありますブンセンモ恐らく化學者だつたから婚姻を忘れたのかも知れせまぬ。

りれから應用化學の方になりますと段々色々の究研が出来まして人の衣食住に便益を與ることもあります。しかしりんなことをいふとウツカリ自分の田へ水を引くやう

で悪るう御坐んすから今日は此の位にして置きませう。うこでこういう風に研究に實が入つて研究の結果が出来るると眞の結果で其の結果によつて世間の利益になることも往々あるものであります研究の仕方を倒まにしてこういう發明を致様と先づ目的を付夫れに都合の宜敷道理を探索し種々様々な方法を以て之を試るときは所謂こむつけ道理の結果が出来てや、もすれば誤りが其の中にあつてならぬものであります、斯く申せば學問上の研究は道樂者流の仕事にて空なものと思はる、人も有ませうが蓋し研究から出た結果は眞の法理に叶ひ實益の多ひ者で實益を目的とした研究には誤りの入り易いものであります此に又目的を付て研究するもの、余り扁り過た一例を擧げますれを或る人がダイヤモンドは山から出ると言ふを聽込み腰辨當で山へ行つて朝から晩迄搜して毎日幾年間搜しても何分見當ませぬこれの其の研究に毫も分析法を用ひざる過ちであります今若しこれを分析法から考へますれば最初にダイヤモンドはどういふ地層に出るものかといふを定め其の地層が日本にあるかどうか

かといふことから考へなければならぬりれから段々推

も出来、立派な學者にもなられませう。西洋の學者の大

かといふことから考へなければならぬ。それから段々推考へて挿す中に、あるかなにかと云ふを暫くにて判然するものでせう然し兎角世間には腰辨當で出ると晝飯前にめつけるやうな僥倖ものがあるには因ります、かういふ人は必ず學問の面例なものだれ見たやうな近道をせねばいかんなどといひませう併しこれ人間中幾萬分の一の僥倖者でありませう乎若し凡ての人が此の僥倖を俟つ日は幾萬人の中の一人を置いてあとの悉皆かつへ死をせねばならぬと申すものでせう是を見て學問と云ひ學問上の研究は必要なとは判然したてでありませう、今日は大分これから研究される方、またこれまで研究された方が居らる、やうでありますが其のれ方に申します研究にはまはりみちを、厭はぬか宜敷しくあります上野に行にも王子から飛鳥山をまはつて行けば王子でかういふことを見たといふやうな研究が出来ませう、研究も其の通りで研究中に楽しみが出て來まして其の中には道すがら立派な發明をすることがあるものです。まはり遠いことをするのも楽しみとして研究した曉きには立派な發明

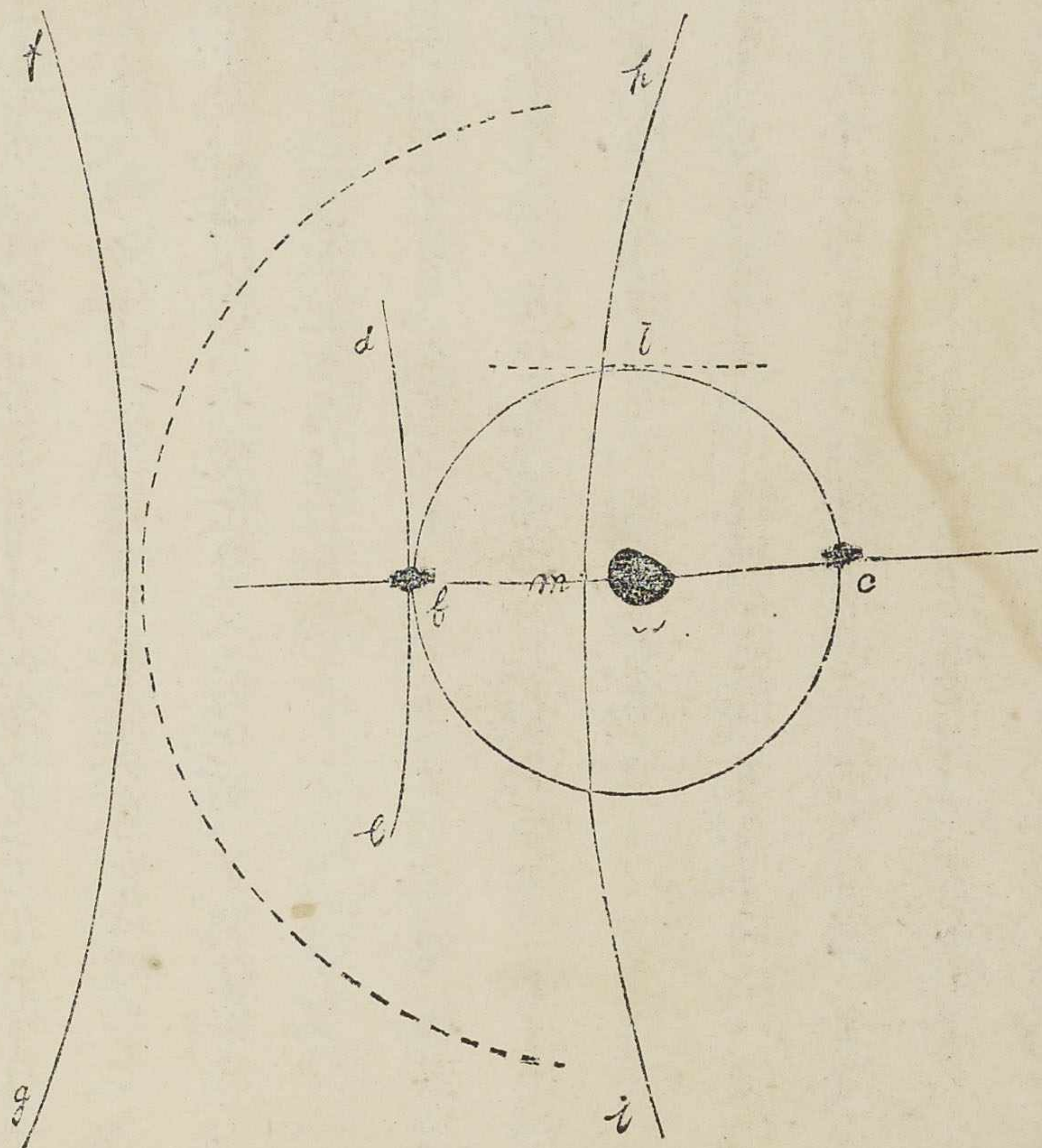
も出來、立派な學者にもなれませう。西洋の學者の大學者といふのと、たゞの學者といふのは研究の數の多いと少ないとに、よることでありませう。

私は今日はたゞ研究は大切なものであるといふことを申し上げただけであります。私も研究中であります。本會の幹事さんから講談をしろといふ請求をされましたから「研究の話」と題し長々申し上げました。定めて御退屈でありましたらう。あとは外山先生が面白く演説あるのだからを樂みにを聴きなすつて下さい。

雜報

○一月二日の夜ハロの現象 同日ハ舊曆の廿日に當れるが、余は夜の十時頃友人數名と三番町を通行せしに、東方に懸れる明月、地平を離るゝと凡る三四十度にして其周圍に鮮明なるハロの現象を現はしたり。圖中aは月なりb及びcは英語にて Mock-moon (贗月) と譯すべきか、獨逸語にて Nebensonne (權月の意) と稱する者なり。b a c なる線は通常一直線の如く画きあれども、此のハロは於ては

a b は地平に平行にて、a c は少しく傾むきたると凡う



圖の如くなりし。又 d b e なるハイペルボル 様の接觸線
 ありしが、之はしなる處に点線を以て示せる如く現るゝ
 が通例なりと云ふ、後藤牧太君が千葉にて見られし者ハ
 其一例なり(當雜誌第五十六號五百廿四葉)。其外 f g なる
 曲線ありしが、之は此夜見へざりし所の第二圓線(第一
 圓の半經視角は二十一三度、第二圓の半經視角ハ四十六

度なり、此圖は現象の大体を示すのみにて、月と圓との
 大さ等は勿論比例を得たる者にあらず(に屬する接觸線
 ならんと、難波氏言れたり、或ハ然らん。b は極めて明瞭
 にして小しくスペクトル色を帯びたり。b a なる線は最
 初は無かりしが次第に b より a の方に現はれ出でたり、
 a なる月の傍に h m i なる曲線あり、是も何か意味ある
 とならんと思ひしが、時の過るに従ひ追々左より右に移
 動したるを見れを多分ハ口現象の野次馬ならん。h i の
 左方は右方より鮮かに晴れ渡れり。其他滿天に通例と異
 なりて奇体に規則立ちたる界線を有する微白の雲を見た
 り、此現象を見るを凡う十五分間なりしが線及び Mock-
 Hoop 等の鮮明の度は終始同じからざりし、(村)
 ○「グルーコス」或は葡萄糖の合成 化學者の自然物を人
 造に成出して理學上并に工業上莫大なる裨益を與へしと
 は此れまで屢々ありしとなるが今近着の獨乙化學會報告
 を閱するにエミル、フィシヤ及びゼー、マトフェルの兩氏は
 今度「グルーコス」或は葡萄糖の合成を仕遂げたるの一事
 を記載せり此含成たる化學者の常に試みたる所なるが種

々の困難ありて未だ曾て好結果を得ざりき然るにフィシヤ及びターフェルの兩氏ハ「アクロロリン」より仕事を始め遂に人造の葡萄糖を得たり讀者中化學に従事せらる諸氏にハ一大要件と思われ茲に其報道を爲し餘白なきを以て試験の委細は次号に於て之を記載すべし

○東京化學會 同會よては此れまで其會誌を毎年四回刊行なし來りしが編輯委員諸氏の勉強にて之れを毎月一回出版し且つ每号外國諸雜誌より重要な件を抄譯して之を物理化學、無機化學、有機化學、分析化學、工業化學等の部門に分ちて記載すと言ふ

○ブロクサム氏 倫敦「キングス、コレージュ」の化學教授にして有名ナル化學者ブロクサム氏は去る十一月廿九日に死去したる由最と惜きをにこり

○酸素の工業 空氣より酸素を製出する最良法の酸化バリウムを空氣中に熱して過酸化バリウムとなし次に其過酸化バリウムを強く熱して再び酸化バリウムと酸素とよ分解せしむるよ在り故に此作用を反覆すれば初め若干量の酸化バリウムを用いて永久多量の酸素を製出し得べき

理なれ共是迄此法を實用すると能はざりしは蓋し空氣中に含有する汚物の爲めに漸々酸化バリウムの不純となりて遂に酸素を吸収する性質を失ふが故なり然るに近頃英國倫敦府に於てブリン氏の酸素會社と稱する一社を設け同府のウエストミンスターに一工場を開き前記の法を以て多量に酸素瓦斯を製出する事業を記したり今同國の工業雜誌に就きて其方法の大意を爰に記せん

に該場にハ鍛鐵製のレトルト(直徑八インチ長十二フィート)七十二個を装置し管を以て互に之を連續せしめ而して各レトルトに酸化バリウムを充てポンプを以て豫め苛性ソーダと石灰とを通して精製したる空氣を此中に輸送し約り攝氏六百度の熱を加れハ酸化バリウムの空氣中の酸素を吸収し過酸化バリウムと爲るべし是に於て熱度を八百度に上げて且つポンプの作用を反轉してレトルト内の壓力を減ずれば右の過酸化バリウムハ次第に分解して酸素と酸化バリウムと變ずるを以て其遊離したる酸素を通常の瓦斯溜に入れて貯へ而して後レトルトの熱を減じて六百度となし又之よ空氣を送りて其殘留せる酸化

「バリウム」を過酸化物を爲し總て前法を反覆施行するなり斯の如くして製出したる酸素の價ハ現今千立尺に付英貨十二シリング即ち我三圓六十錢程なれ共若し燃料の安き地方に於て此製造を爲し且つ同時に放棄する所の窒素を利用すべき途を開かば酸素の價も亦隨て下落すべし又酸素は冶金術及び其他の諸工業に用ゐて頗る便益を與ふる物なれば向來此瓦斯を製造する事業ハ日を追て盛んに至るべきなり

○ニウトン祭 此祭ハ毎年理科大學の數學、星學、及物理科の教員及學生の執行するものにして本誌第六十四号に一昨年の祭の有様を掲げたりしが又昨年十二月廿五日(ニウトンの誕生日)にも例の如く之を行ひ中々盛なる事にて有りしと

○田中館愛橘君 ハ明治十五年東京大學の物理學科を卒業し夫より常に大學に奉職し非常の勉強家にして且意匠に富み出藍の榮名學者中間に高かりしが今度文部省より留學を命ぜられ去る一月十五日横濱を出發せり氏ハグラスゴー府に趣き當今理學の泰斗と仰がる、トム

ソン先生は就て尙ほ研究に従事する筈なりと大學の人々も實は將來大學者と成り本邦人の榮譽を増す可き見込有る人なりと云ひ居る由なり○去る十二日富士見軒に於て同氏の爲に送別會を催したるに來會する者六十餘名多くは大學の職員或ハ大學出身の學士にして頗る面白き席上演說數番有りたり

○學士會 同會ハ去月廿六日富士見軒に於て總會を開き左の如く規則を改めたり

會 則

第一條 本會ハ帝國大學ニ關係アル學友相會シ友情ヲ保チ親睦ヲ厚フスルヲ以テ目的トス

第二條 本會ヲ名テ學士會ト云フ

第三條 本會ノ會員タルヲ得ル者ハ左ノ資格ヲ備ヘタル者ニ限ル

第一類 博士學士及大學本科卒業之者

第二類 帝國大學ノ教授助教授及教授助教授タリシ者

者

第三類 第一條ノ範圍内ニ於テ本會ノ特撰ニ係ル者

第四條 本會ハ會員ノ消息及大學ニ關スル事項ヲ報スル

以前に比すれば會費も減じ會員ハ毎月月報を得て學友の

第四條 本會ハ會員ノ消息及大學ニ關スル事項ヲ報スル
爲メ月報ヲ會員ニ頒ツ

第五條 本會ノ事務ハ委員十五名ヲ置キ之ヲ取扱ハシム

第六條 委員ハ總會ニ於テ之ヲ撰ミ其任期ヲ一ケ年トス

第七條 入會セント欲スル者ハ其旨委員ニ申込ム可シ特
撰ニ係ル者ハ委員會ニ於テ之ヲ定ム

第八條 本會ハ事務所ヲ東京府内便宜ノ地ニ設ク

第九條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク但費用ハ當日出席ノ

會員ヨリ之ヲ徴収ス

第十條 會員ハ會費トシテ毎年金貳圓ヲ納ムヘシ

第十一條 退會セント欲スル者ハ其旨委員ヘ申込ムヘシ

第十二條 本會ノ事務ニ係ル細則ハ委員之ヲ定ム

右規則ニ依リ委員十五名ヲ投票セシニ左ノ通り當撰セリ

岡山 兼吉 阪谷 芳郎 植村 俊平

緒方 正規 坪井 次郎 須田 哲造

古市 公威 藤本 壽吉 倉田 吉嗣

外山 正一 嘉納治五郎 日高 眞實

矢田部長吉 三輪桓一郎 坪井正五郎

以前に比すれば會費も減じ會員ハ毎月月報を得て學友の
動靜を知るの便有り會員たるの格資を備へたる人は速
よ申込み玉へ當分の内假事務所ハ東京神田區淡路町淡路
亭なり

○地震動と家屋建築法取調委員會 我邦は古來地震多く
家屋の破壊人命の損傷を受けしと歴史に徴して明なり又
近年西洋風の家屋建築法を採用せし以來公共の建物及ひ
住家の材料に追々石、煉瓦を用るととなり木造にても今
まで見慣れざる三階四階の大厦を現出するに至れりされ
む若し此後不幸も大地震あらんには其破損の模様氣遣
しく人命の損傷却て前日より多かるも計り難しとて言の
我邦建築に及べば先づ地震の影響如何を案するを常とし
此点よ付ては造家學士の苦慮する所なりき然るよ今より
九年前明治十二年日本地震學會の創立あり續て地震計の
發明あり之に由て地動の性質を研究せしより今日に至り
ては大に斯學の進歩を促したりしが文部省に於ては我邦
家屋建築法と地震動の關係を調査するの必要成を察し之
に關する學士を聯合して該件を研究するの目的を以て先

般造家學會、地震學會、工學會、數學物理學會へ其取調を囑託せられたり之に依て造家學會よりは坂本復經、藤本壽吉、小島憲之、地震學會よりはジヨン、ミルン、關谷清景工學會よりは石橋絢彦、井口在屋、的場中、數學物理學會よりは山川健次郎、田中館愛橘の諸氏を委員として其取調に従事せしむるに決したり右委員等は去十二月廿二日始て文部省に集會し渡邊大學總長委員長となり會議を開きたりしが造家學會委員の發議より依り地震專攻の委員より先つ今まで地震動に付き研究したる大要を陳述して各委員の參考に供し之を根據として家屋築造の方案を立つべしとのに決議し本日は是にて散會せり又續て其第二次會を本月十二日同省に開き本日は前會の決議により地震學會委員ジヨン、ミルン氏は地震動の性質に付一席の講義をなし從來歐米の學士が地震動の性質に付誤解を懷きし事、地質及び地形の異なる地に於ては震動に差異ある事、其の他地動普通性に付き委しく説明を下し且つ本邦に於て發明したる地震計の正確なる事を辯明せり右講義録は出版して各委員に頒布するの手續きなり尙ホ本

日ハ文部大臣、同次官、學務局長等傍聽として臨席したり又山口文部省技師は此後右取調委員の一人として出席する由なり」去る十八日委員諸氏は本郷理科大學地震學教室を巡覽したりと

○大學通俗講談會の第二期ハ本誌第七十三号に其會及講談者を記したりしが今此に其講義の題を掲ぐ

十月十五日 海の世界 松原新之助

十一月六日 甲鐵非甲鐵の利害 古布公威

十一月十九日 國會議事堂 緒方正規

十二月四日 研究の話 辰野金吾

十二月十七日 疾病の原因 三宅秀

孰れも大學の教授或ハ高等中學校の教諭方が各其專攻する所の學科に付て講せらるなれば其有益なるをば申すまでも無く或ハ幻燈或ハ圖畫或ハ表等を以て説明されたれば實に面白きをにて有りし右之内にハ已に本誌に掲けたるものも有り未だ掲げざる分は續々之を載せんとす但し本誌にハ講師の校正を乞ひ充分なる圖畫等を加へて後載するとなれば少々延引するは已を得ざれ共本号以下に載

る「ランプ」にも適用し得へし但し口金の一個大小に依り

たる分の版權有れば他の雜誌上にハ見る能はざる所なり

たる分の版權有れば他の雜誌上に見る能はざる所なり
 ○安全「ランプ」 石油の危険なるを皆人の知る所にして往々火災を惹起し甚き人命をも損傷するとは間々聞き及ぶ所なり又安政二年江戸大地震のときには府内三十餘ヶ所より出火せし由なるが是れは我邦にて未だ石油を用ひざる以前のことなり今や府下には數萬「ランプ」を使用するに其油受は甚だ脆弱なる硝子若くは陶器のもの多し萬一安政度の如き地震ありせば「ランプ」より出火するのみにても恐るべき災害を醸すならん然るに先頃倫敦にて「シャフテスベリー」と稱する安全「ランプ」を發明せし人ありしが此「理科大學地學震教室に於て之を購求して用ひられたるものを一見するに其構造甚だ簡便よして且つ巧みなり若し少しにても傾くか若くは臺より落るときは忽ち自然に消火するの仕掛なり其賣價（運賃を除き）は凡金壹圓なる由又東京にても淺草田原町三丁目吉川銈之助氏の發明したる安全「ランプ」は右英國製の如く完全ならざるも頗る巧みなる消火器を備へたり先年來專賣特許を得て發賣するとなるが其口金のみを購求せば如何な

る「ランプ」にも適用し得へし但し口金の一個大小に依り十五錢より二十錢まで位の由なり地震の如きは希有の出來事なれば先づ之を度外に置くも居常石油より起る過失を豫め防んには右等の「ランプ」を用る可り宜しけれ

○本社へ寄贈セラレタル雜誌

交詢雜誌 第二百八十二號

出版月評 第五號

大日本教育會雜誌 第七十一號

中外醫事新報 第七十一號
 第百八十七號

應 問

○球丸電光ノ疑問

學海ノ指針第二號ニ球丸電光ノ存在ヲ確ムル新報ヲ掲ケタリ、予モ亦火球ヲ見タリ其大サ直徑五寸許アリシ、青赤色ノ光輝ヲ發シ空中ヲ飛行シタリ

右ハ如何ナル理アル者ナリヤ小生ニハ了解致兼候間貴社雜誌ノ餘白ヲ以テ其理ヲ詳細御教示アラシムコトヲ乞フ

信濃國小縣郡東内村

東洋學藝社御中

前 田 嘉

答

此現象ニ就キテハ問々右新報ノ如キ者アルノミニテ未ダ信憑スベキ説明ナキガ如シ

○墜体速度ノ疑問

空洞ナル金屬球ト之ト同立積ナル實質ノ同金屬球トヲ空氣中ニ墜セバ乙ハ甲ヨリ速カニ墜ツルハ何故ゾ、又空氣中ニアツテハ紙片ト金屬球ト同時ニ墜チザルハ何故ゾ、貴社雜誌餘白ヲ以テ御教授被下度此段願上候也

田 中 濤 堂

東洋學藝社御中

答

此問題ヲ解クニハ或ル速度ヲ以テ空氣中ニ運動スル物體ノ質量 m ハ摩擦(空氣ノ存在ニ依テ生スル抵抗ハ種々アレバ假リニ之ヲ總稱ノ摩擦ト云フ)ノ爲メニ起ル速度ノ變化ニ如何ナル關係ヲ有スルカヲ考究セザル可ラズ右ノ物體ガ最初有スル運動ノエ子ルギー(エ子ルギー及

ビ仕事ノ大意ハ當雜誌第六十三号當應問者ノ熱學講義中ニ解ケリ就テ見ルベシ)ハ $\frac{mv^2}{2}$ ナリ、又摩擦ニ反シテ或ル仕事 a ヲ奏シタル後ノ速度ヲ v' トスレバ其エ子ルギーハ $\frac{mv'^2}{2}$ ナリ此二ツノエ子ルギーノ差ハ即チ仕事ナリ

$$\frac{mv^2}{2} - \frac{mv'^2}{2} = a$$

ナリ故ニ

$$v' = \sqrt{v^2 - \frac{2a}{m}}$$

トナル、是レ v 、 m 及ビ a ノ關係ナリ

問題ノ第一部ニ係ル甲乙二球 m_1 及ビ m_2 ガ共ニ a ナル仕事ヲ奏シタル後ノ速度 v_1 及ビ v_2 如何ト云フニ前式ニ從テ左ノ二式ヲ得

$$v_1' = \sqrt{v_1^2 - \frac{2a}{m_1}}$$

$$v_2' = \sqrt{v_2^2 - \frac{2a}{m_2}}$$

若シ $m_1 < m_2$ ナルハ $\frac{2a}{m_1} > \frac{2a}{m_2}$ ナリ故ニ $v_1' < v_2'$ トナル是レ實質金屬

球ノ墜ル^{フツ}空洞ノ同形同金屬球ヨリ速カナル^{スヤ}所以ナリ問題ノ第二部ハ a 及ビ m 共ニ不同ナル普通ノ場合ナリ此

場合ニ於テハ v ハ a ナル商ニ關係ス凡ソ表面大ナレハ空氣トノ摩擦大ナリ故ニ之ニ反シテ奏スベキ仕事 a モ亦大ナリ今紙片ニ於テハ m ハ割合小ニシテ a ハ割合大ナリ故ニ a 益々大ニシテ v 小ナリ、金屬球ハ之ニ反シ m ハ割合大ニシテ a ハ割合小ナリ故ニ a 益々小ニシテ v 大ナリ、是レ金屬片ノ墜ツル v 紙片ヨリ速カナル所以ナリ

金屬片ト雖モ金屬ノ如ク薄クシ充分ニ表面ヲ大クナシ a ナル商ヲシテ紙片ニ於ケルガ如クナラシムレバ兩体共ニ同速ヲ以テ墜ツルナラン

言葉ノミヲ以テ此問題ヲ解スルハ些ト難キナレ上ノ式ヲ了解セザル者ノ爲メニ試ニ之ヲ述ベン、抑モ第一疑問ノ起ルハ何故ゾト云フニ次ノ如ク考フルニ依ルナラン

真空ニテハ同速ヲ以テ墜ツル二体ガ、空氣中ニ於テ然ラザルハ、質量ノ不同ニ原因スルニアラズシテ、全ク摩擦ニ大小アルガ爲メナリ、然ラバ表面ガ同シコニテ摩擦ニ不同ナキハ、墜ノ速度モ亦不同ナキ理ナリト

成ル程墜ノ速度ハ質量ニ關係ナキコナレモ摩擦ニ打ち勝

ツノ能(エ子ルギト)ハ質量大ナル者ニ於テ大ナルナリ、今自轉車ト大ナル蒸氣車ト同速ヲ以テ進ムトセンニ自轉車ガ往來ノ人ニ突キ當レバ多分中止スベシ然ラザルモ其瞬間ハ餘程速度ヲ減ズルナラン、然ルニ蒸氣車ニ於テハ二人ヤ三人ガ並ンデ鐵道往生スルモ幾ド速度ノ變化ヲ感ゼサルナリ、是レ彼ノ質量小(故ニ抵抗ニ打ち勝ツノ能小)ニシテ此ノ質量大ナルガ故ナリ、空洞球ノ變化ヲ受クル v 大ニシテ實質球ハ小ナルモ其理一ナリ、又紙片ハ表面ガ割合大ニシテ質量ガ割合小ナル故ニ摩擦ヲ受クル v ハ多ク之ニ打ち勝ツノ能ハ小ナルヲ以テ墜ツル v 金屬球ヨリ遅キナリ

第一高等中學校教諭

村岡範爲馳

○東海ケイ、エス氏ヨリ土壤分析法ノ質問ニ答フル v 左ノ如シ

土壤分析法 農學士 渡邊 朔

土壤ヲ分析スルニハ種々ノ方法アリト雖モ概子鹽酸浸出法ヲ以テ足レリトス即チ左ノ諸成分ヲ檢定スルニアリ

水分

Hygroscopic Water

熱灼際ノ損失 (有機分及化合水分) Loss on ignition (Organic matter & Combined water)

不溶解殘分

Insoluble residue

鹽酸ニ溶解セル硅酸

Lio₂, Soluble in HCl

酸化鐵

Fe₂O₃

礬土

Al₂O₃

酸化滿庵

Mn₂O₃

石灰

CaO

苦土

MgO

磷酸

P₂O₅

剝篤亞斯

K₂O

曹達

Na₂O

硫酸

SO₃

水分及灼熱際ノ損失ヲ檢定セント欲セバ豫メ秤リ置キタル坩堝中ニ風乾土十グラムヲ取り之ヲ百十度(攝氏)ノ熱ニテ凡三日間乾シ而テ秤量シ更ニ一日間同熱度ニテ乾燥シ而テ秤量スベシ前後兩回ニ秤レル重量ニ差異アラバ更ニ

差異ヲ呈サ、ル迄幾日間ナリトモ乾燥シ後一定ノ重量ヲ得タルト之ヲ風乾土ノ重量ヨリ減ス其差ハ即水分ナリ(之ニ一〇、ヲ乘スレハ)百分率ニ改算スルヲ得

斯ノ如ク水分ヲ除去シタルモノヲ更ニ八時間程酒精燈火ニテ灼熱ス冷却シテ後秤量シ水分ヲ除去シタル土壤ノ重量ヨリス此差ハ灼熱際ノ損失ト稱シ有機分及化合水分ナリ(全上)

鹽酸浸出法○土壤五十「グラム」ヲ取り之ヲ玻璃壺ニ入レ更ニ強鹽酸(比量一、)百五十立方「センチメートル」ヲ注スシ砂鍋上ニ上ケ酒精燈火ニテ熱ス而テ沸騰一時間ノ後水(蒸溜水ヲ用ユルナリ)ヲ加ヘテ漏過シ淨洗ス(以下做之)

漏斗中ニ存セルモノハ不溶解殘分ナリ乾燥灼熱シ之ヲ秤量ス(之ヲ二倍シテ百分率ヲ算出ス)

漏過液ハ陶皿中ニ移シ蒸發乾固セシメ後百〇五度(攝氏)乃至百十度ニ熱シ酸氣ヲ發セザルニ至ラバ之ヲ冷却セシメ鹽酸及水ヲ注キ湯煎鍋ニ上ケテ温ムルナリ然ルルハ其多量ハ再ヒ溶解ナスモ尙白色沈澱ヲ生スベシ之レ鹽酸ニ溶解セル硅酸分ノ分離セルナリ即チ漏過シ溶液ハ一リト

ル壺ニ受ケ漏斗中ニ留マレルモノハ灼熱秤量ス即チ鹽酸

算出ス

ル壘ニ受ケ漏斗中ニ留マレルモノハ灼熱秤量ス即チ鹽酸
ニ溶解セル硅酸分ナリ(之ヲ二倍シテ百分率ヲ得)

漏過液ハ更ニ水ヲ和シ「リートル」トナスベシ即チ初メ
五十「グラム」ノ土壤ヲ浸出セシヲ以テ此浸出液二十立方

「センチメートル」ト「グラム」ノ土壤ニ相當ル(以下諸成分ハ

此比例ニテ百分率ヲ算出スルヲ得ベシ)

此浸出液二十立方「センチメートル」ヲ取り炭酸曹達一

〇「ペルセント」溶液ヲ以テ中和シ温湯ヲ和シテ稀薄ニ

ナシ更ニ少許ノ醋酸曹達一〇「ペルセント」溶液ヲ注加シ

沸騰セシムベシ然ルハ赤色沈澱ヲ生ズ即チ之ヲ漏過ス

(此沈澱ヲ洗フニハ少シク醋酸曹達ヲ加ヘタル熱湯ヲ用ユベシ)沈澱中ニ於テ鐵及礬土

ヲ檢定シ漏過液中ニ滿俺石灰及苦土ヲ檢定ス(此漏過液ハ假ニ第一號漏過)

液ト稱ス)

此赤色沈澱ハ之ヲ鹽酸ニ溶解シ後皿ニ入レテ蒸發シ殆ト

乾固セントスルノ際温湯ヲ注加シ之ニ苛性ポツターズ溶

液ヲ加ヘ沸騰セシム然ルハ礬酸鐵及酸化鐵ハ沈澱ス之

ヲ漏過シ漏斗中ニ留マルモノヲ灼熱秤量ス後此重量ヨリ

土壤「グラム」中ニ含有セル磷酸分ヲ減シ酸化鐵ノ量ヲ

算出ス

此漏過液ハ尙礬土ヲ含有ス少量ノアンモニア水ヲ和スレ

バ沈澱ス沸騰漏過シテ漏斗中ニ留マル礬土ヲ灼熱秤量ス

前ノ第一號漏過液ハ滿俺石灰上苦土ヲ含有ス之ヲ陶皿ニ

移シ湯煎鍋ニ上ゲ凡卅立方「センチメートル」ニ蒸發シ再

之ヲ嘴杯ニ移シ臭素溶液ヲ注加シ温處ニ凡五六時間放置

セバ暗赤色ノ沈澱ヲ生ス之ヲ漏過ス漏斗中ニ留マル沈澱

ハ更ニ鹽酸ニ溶解シ之ニ炭酸曹達一〇「ペルセント」溶液

ヲ注加ス即チ生セル沈澱ハ四酸化三滿俺(Fe₂O₃)ナリ之

ヲ灼熱秤量シ因數一、〇三五ヲ乘シ三酸化二滿俺(Fe₂O₃)

ニ改算ス

臭素ニ依テ滿俺ヲ分離セル漏過液ハ少許ノ鹽酸若クハ醋

酸ヲ以テ酸性トシ燈火ニ上ケ沸騰セシメ之ニ修酸アンモ

ニヤー一〇「ペルセント」溶液ヲ注加ス即チ修酸石灰ノ白色

沈澱ヲ生ズ之ヲ漏過シ漏斗中ニ留マルモノヲ強ク灼熱シ

更ニ二三滴ノ硫酸ヲ以テ之ニ混シ砂鍋ニ上ケ熱シ酸氣ノ

尽クルヲ待チ再ヒ灼熱秤量ス即チ硫酸石灰(CaSO₄)ナリ

之ニ因數〇、四一二ヲ乘シ石灰ニ改算ス

石灰分ヲ分離セル漏過液ハ尙苦土分ヲ含ム之ニ磷酸曹達
一〇「ペルセント」溶液及鹽化アンモニア溶液ヲ注キ更ニ

全量ノ三分ノ一量ノ強アンモニア水ヲ注加シ冷處ニ放置

スルヲ凡十二時間ニシテ磷酸苦土ノ ($Mg_3P_2O_7$) 沈澱ヲ生

ス漏過シ(淨洗ニハ二〇「ペルセント」
トアンモニア水ヲ用ユ)漏斗中ニ留マレルモノ

ヲ灼熱量秤シ之ニ因數〇、三六ヲ乘シ苦土ニ改算ス

磷酸、硫酸、剝篤亞斯及曹達ヲ檢定スルニハ別ニ鹽酸浸出

液ヲ取ル浸出後ニ百立方「センチメートル」(風乾土十グ)

ヲ取リアンモニアヲ注加スレバ赤色沈澱ヲ生ズ之ヲ漏過

シ液ハ陶皿ニ移シ蒸發シテ硫酸、剝篤亞斯、及曹達ノ檢

定ニ供ス(假ニ第二号漏
過液ト稱ス)

漏斗中ニ畱レル沈澱ハ更ニ硝酸ニ溶シ之ニモリブテ酸ア

ンモニア溶液五十立方「センチメートル」ト全量ノ三分一

量ノ硝酸アンモニア七五「ペルセント」溶液ヲ注加シ三四

時間攝氏凡八十度ノ温處ニ放置ス即チ黄色沈澱ヲ生ズ之

ヲ漏過シ(淨洗ニハ硝酸アンモニア一
〇「ペルセント」溶液ヲ用ユ)更ニアンモニア水

ニ溶解シ冷却シタル後鹽化アンモニア溶液及鹽化苦土混

和液十立方「センチメートル」ヲ徐々注加シ更ニ全量ノ

三一分量ノ強アンモニア水ヲ注加ス凡十二時間ノ後磷酸
苦土 ($Mg_3P_2O_7$) ノ白色沈澱ヲ生ズ之ヲ漏過シ二十「ペ

ルセント」アンモニア水ニテ淨洗シ灼熱量秤シ因數〇、六

四ヲ乘シテ磷酸ニ改算ス

前ノ第二号漏過液ハ硫酸剝篤亞斯及曹達ヲ含ム之ヲ適宜

ノ量ニ蒸發シ鹽酸二三滴ヲ加ヘ酸性トシ鹽化バリウム一

〇「ペルセント」溶液ヲ注加シ沸騰スレバ硫酸バリウム

$BaSO_4$) ノ白色沈澱ヲ生ズ之ヲ漏過シ漏斗中ニ留レルモ

ノヲ灼熱量秤シ之ニ因數〇、三四ニヲ乘シ硫酸ニ改算ス

漏過液ハ適宜蒸發シ炭酸アンモニア溶液ヲ加ヘテ過剩ノ

バリウム分及亞爾加里土類ヲ沈澱セシメ漏過シテ之ヲ取

リ漏過液ヲ蒸發灼熱シ亦水ニ溶解シ炭酸アンモニアヲ加

ヘ更ニ沈澱アレバ之ヲ除キ數回之ヲ試ミ沈澱ヲ生ゼザル

ニ至リテ漏過液ニ二三滴ノ鹽酸ヲ加ヘ蒸發シ弱ク灼熱シ

テ秤量ス之レ鹽化ポツタツシウム及鹽化ソジウムナリ之

ヲ水ニ溶シ鹽化プラチナ溶液ヲ加ヘ殆ト乾固スル迄蒸發

シ八〇「ペルセント」ノアルコールヲ注ガバ鹽化プラチナ

ポツタツシウム鹽 ($PtCl_2 \cdot 6H_2O$) ノ結晶ハ溶解セズシテ皿底

ニ殘ル之ヲ漏過シ八十「ペルセント」アルコールニテ淨洗シ乾燥秤量ス之ニ因數〇、一九三ヲ乘シテ剉篤亞斯ニ改筭「」此鹽化プラチナボツターシウムノ重量ニ因數〇、三〇五ヲ乘シ鹽化ボツタシウムニ改筭シ先ニ秤リ置キタル鹽化ボツタツシウム及鹽化ソジウム鹽ノ重量ヨリ減ズルルハ鹽化ソジウムノ重量ヲ得ル之ニ因數〇、五三ヲ乘シ曹達ニ改筭ス

社 告

本誌ハ本号を以て第五卷の始とし此より十二冊即一ヶ年を以て一卷を成すものとせり

本號より内務大臣の許可を得て出版條例に依るものとなり且版權を得たり因て今後益諸先生の貴重なる論說記事を掲載す可し

本誌は三十二「ページ」を以て一号と爲すの定めなりしも

近來貴重材料頗る多く一昨年之始比よりは每号四十ページ以上にして特に七十四號七十五號の如きは五十二三ページとなり之に加ふるに美麗なる銅版石版等有り然れ

共定價ハ少しも増加せず唯紙數の増したる爲に郵便稅壹錢の所二錢となりたり故に地方の愛讀者には自然代價の増したる態なりしが今度左の如く改正したれば陸續御注文有る可し

本誌一冊定價

拾錢

六冊前金(郵送稅共)

六拾錢

十二冊前金(郵送稅共)

壹圓二十錢

又本誌賣高追々増加し現今の處にても一萬人以上の讀者(重に教員生徒)有る計算なれば公告料左の通り改正す

五号文字一行(二十五字詰)

十錢

半「ページ」以上

二割引

東洋學藝雜誌第七十四號

明治廿年十一月廿五日發兌

目 録

- 熱學講義第六回 第一高等中學 村岡範爲 馳校教諭
- 養子論(前号の續) 文科大學教授 外山正一
- 化學の變化(前號の續) 第一高等中學 久原躬 弦校教諭
- 海の世界 第一高等中學 松原新之助校教諭

○貨幣の話(前々號の續)法科大學教授 和田垣鎌三
 ○微粒子病肉眼鑑定法(前號)東京農林
 學校教諭 佐々木忠二郎

雜報

○全世界植物園の數○バストトル氏○パラフ井ン油○伯
 林理科大學○火葬會の延期○女子大學教授となる○結核
 バチルレン蠅の媒介に由て傳播す○書籍猩紅熱の媒介を
 爲す○セルトル氏○獨逸國醫科大學學生の數○伯林醫科
 大學懸賞問題○喫煙の害○ワイコツフ氏の書翰○日蝕餘
 聞○黒き雨○胎兒の性を前知する法○透明の圖引紙○人
 造肥料○獨逸の日本地圖○帝國大學運動會陸上競技○專
 賣特許○帝國大學紀要○學海の海賊○本社へ寄贈せられ
 たる雜誌

雜錄

○南洋諸島巡廻記事 理科大學助教授 菊池 安
 ○スベンセル、フレルトン、ベヤド君小傳 松原新之助

應問

○加藤氏ヨリ兩頭ノ蛇ニ就キテノ質疑 理科大學内一動物學士

東洋學藝雜誌第七十五號

明治二十年十二月廿五日發兌

目録

○加藤弘之氏の東洋の一大問題論を駁す 文科大學 教授 外山正一
 ○日本の舊世界(前々号の續) 理科大學 教授 小藤文次郎
 ○我國の土蠻に就きチャンバレン氏の說を評す 三宅米吉
 ○海の世界(前号の續) 第一高等中學校教諭 松原新之助
 ○明治廿一年一月一日より實施せらるべき日本標準時の説明 理科大學 教授 菊池大麓

雜報

○キルヒホツフ氏死す○日蝕圖○松山の百穴○シートボル
 ドの名を騙る○全世界の動力○地理學教授法○伊太利國
 地象取調委員會○世界の船數○熊本縣地質調査○製煉社
 ○本社へ寄贈せられたる雜誌

雜錄

○英國理學獎勵會 英國林娜學士院會員 伊藤篤太郎

批評

○ラトルデン氏著 越曆書の批評 理科大學 教授 山川健次郎

東京下谷區竹町廿七番地

廣告

植物學雜誌

第十號明治廿年十一月廿五日發兌一册十二錢郵稅一錢六
册前金郵稅共金七十二錢○論說●しまごせり(圖入)牧野
富太郎君●伊勢紀伊植物採集紀行(圖入)三好學君○雜錄
●異形菌茸●上外莖植物(第七號ノ續)●報知新聞ノ植物
學●帝國大學植物園目錄●なんじやもんじや●ちんぷく
りん●其他數件

發行所

東京神田 裏神保町 **東京植物學會編輯所**
賣捌所 日本橋 通リ三 **丸善** 神田裏 神保町 **敬業社**

理化器械及藥品

謹而奉賀新年候尙本年モ倍舊御引立奉希候

但シ定價目錄御入用ノ節ハ御通知次第呈進可仕候

明治二十一年一月一日

學藝器械藥品製造所

製煉社

東京下谷區竹町廿七番地

全神田區和泉町壹番地

器械藥品販賣所

全商店

法學協會雜誌

第四十五號明治廿年十二月八日發兌壹册十錢郵稅壹錢六册前金郵稅共金六十七錢

○討論筆記●講談筆記出版差止訟求ノ件積極主論者法學士高橋捨六君消極主論者法學士馬場愿治君○論說●治外法權論米國法律博士鳩山和夫君○講義●英國商船法法學士西川鐵次郎君●翻譯○損害賠償法英國狀師インダルモール氏著會員工藤仙太郎君譯○判決●一千八百八十七年六月十三日上院判決「ケヤド」對「サイム」ノ上告事件○雜報●國家學要論●同書ニナセル金子氏ノ叙●女ノ死刑

發行所

東京神田裏神保町 **法學協會雜誌社**

法學協會雜誌

第四十六號明治廿壹年一月廿日發兌壹册拾錢郵稅壹錢六册前金郵稅共金六十壹錢

○討論筆記●講談筆記出版差止訟求之件(前号ノ續)積極

主論者法學士高橋捨六君消極主論者法學士馬場愿治君○
 論說●一般名譽回復事件ニ就キ權利者ハ義務者ヲシテ謝
 狀ヲ廣告セシムルノ權利ヲ有スルヤ否會員中橋徳五郎君
 ●無賃委託ニ約因ナキヤ會員法學士高橋捨六君○翻譯●
 損害賠償法(前号ノ續)英國狀師インダトモール氏原著會
 員工藤仙太郎君譯○本會紀事●會員彙報○雜錄●穗積陳
 重氏●土方氏の契約法●法學士會●橫濱港に於ける裁判
 官と代言人の會合●英吉利法律學校新築落成す●相撲社
 會代言人諸氏を招待す●監督法律學校の卒業生

東京神田裏神保町

發行所 法學協會雜誌社

生徒募集廣告

今般學期ノ初メニ於テ新ニ入學ヲ許スニ付志願ノ者ハ來
 ル二月十日迄ニ履歷書持參本校へ申込ムベシ
 但シ規則書望ミノ同キハ郵券二錢送付アレ

神田區小川町一番地

廿一年一月

私立 東京物理學校

帝國大學御編纂
理科植物標品目錄 全一冊 定價二圓

本書ハ帝國大學ニ於テ採集セラレタル内外ノ植物ノ名稱
 ヲ編纂セル者ニシテ全編ヲ三區分ニ別チ即其第一區分ハ
 内國ノ植物ヲ舉ケ第二區分ハ支那ノ植物第三區分ハ朝鮮
 ノ植物ニシテ各分類臚列シ少シモ洩ス所ナシ且一々其産
 地ヲ明說シタレバ苟モ植物學ニ志ス人ハ坐有欠クベカラ
 ザル要書ナリ

矢田部 良吉君閱
 松村 任三君編

理科大學教頭
日植物名彙 全一冊 定價金二圓

右ハ本邦所産ノ植物二千有餘ノ新撰羅匈名ヲ「アルアベ
 ヲト」ノ順ニ臚列シ對譯スルニ和名漢名及ヒ各植物所屬
 ノ科名ヲ以テシ且卷末ニハ片假名羅馬字漢字ノ三様ノ見
 出シヲモ加ヘ極メテ内外人ノ檢索ニ便ニシタル書ナリ

松村任三君著
植物學語鈔 全一冊 定價金二十錢
 郵稅 四錢

東京大學御編
小石川草木圖說 石板摺 着色大本
 定價金六圓

卷之一 同 金九圓
 卷之二 同 金六十錢
 卷之三 第八 同 金六十錢

東京日本橋通三丁目

丸善書店